

# 平安京左京三条三坊十町 (押小路殿・二条殿) 跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京三条三坊十町  
(押小路殿・二条殿) 跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様に広く公開し活用いただけるよう努めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。平成14年度の第7冊目として、このたび京都労働局の建設に伴います平安京跡の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に厚くお礼ならびに感謝を申し上げます次第です。

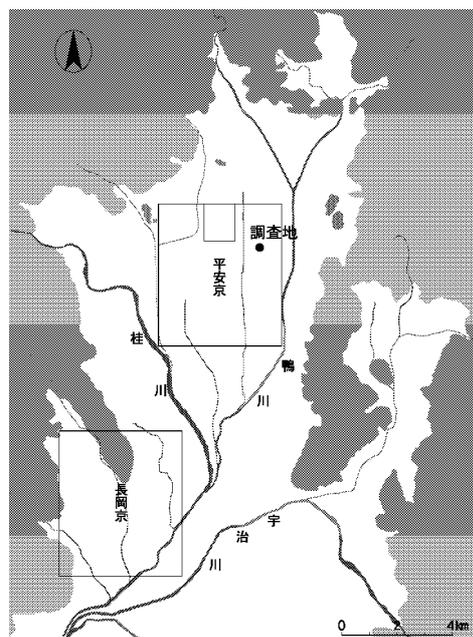
平成14年7月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京三条三坊十町（押小路殿・二条殿）跡
- 2 調査地点所在地 京都市中京区両替町通御池上る金吹町451番地
- 3 委託者及び承諾者 近畿地方整備局長 鈴木藤一郎
- 4 調査期間 立会調査：2001年9月17日～2001年9月21日  
発掘調査：2001年10月15日～2002年4月12日
- 5 調査面積 約460m<sup>2</sup>
- 6 調査担当職員 山本雅和・太田吉男・上村和直
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「三条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前） 平面直角座標系 （ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度（座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した）
- 10 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 11 遺物番号 土器類・瓦類・木製品の順に通し番号を付した。
- 12 整理担当職員 資料整理：山本雅和・太田吉男  
写真撮影：村井伸也・幸明綾子  
保存処理：竜子正彦・ト田健司
- 13 作成担当職員 山本雅和
- 14 木製品の樹種鑑定は北野信彦氏（くらしき作陽大学）のご教示を得た。  
庭石の石材鑑定は橋本清一氏（京都府立山城郷土資料館）のご教示を得た。  
米沢市博物館のご協力をいただいた。



（調査地点図）

# 目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺跡の位置と環境	1
( 1 ) 位置と環境	1
( 2 ) 周辺の調査	2
3 . 遺 構	4
( 1 ) 層序と遺構の概要	4
( 2 ) 第 1 面の遺構	5
( 3 ) 第 2 面の遺構	6
( 4 ) 第 3 面の遺構	12
( 5 ) 第 4 面の遺構	13
( 6 ) 第 5 面の遺構	14
( 7 ) 第 6 面の遺構	14
4 . 遺 物	19
( 1 ) 遺物の概要	19
( 2 ) 土器類	20
( 3 ) 瓦 類	24
( 4 ) 木製品	24
( 5 ) その他の出土遺物	27
5 . ま と め	28
( 1 ) 庭園の構成	28
( 2 ) 遺構の変遷	29

# 図 版 目 次

図版 1	遺構 第 1 面遺構実測図 ( 1 : 150 )
図版 2	遺構 第 2 面遺構実測図 ( 1 : 150 )
図版 3	遺構 第 3 面遺構実測図 ( 1 : 150 )
図版 4	遺構 第 4 面遺構実測図 ( 1 : 150 )
図版 5	遺構 第 5 面遺構実測図 ( 1 : 150 )
図版 6	遺構 第 6 面遺構実測図 ( 1 : 150 )

図版 7	遺構	1	第 1 面全景（東南東から）
		2	第 1 面建物10（東から）
図版 8	遺構	1	第 2 面西部遺構群（北から）
		2	第 2 面土壌159石垣（北西から）
図版 9	遺構	1	第 2 面石垣149・石垣151・石垣150（北西から）
		2	第 2 面石垣143c・土壌145断面（東南東から）
		3	第 2 面土壌158・土壌159（西北西から）
		4	第 2 面土壌158北壁（南西から）
図版10	遺構	1	第 3 面全景（西から）
		2	第 3 面汀と景石（西北西から）
		3	第 4 面建物240（東から）
図版11	遺構	1	第 4 面全景（西から）
		2	第 5 面全景（西から）
図版12	遺構	1	第 6 面全景（西から）
		2	第 6 面建物215（北から）
		3	第 6 面井戸218（東から）
図版13	遺物		出土土器 1
図版14	遺物		出土土器 2
図版15	遺物		出土軒瓦
図版16	遺物		出土木製品

## 挿 図 目 次

図 1	調査地位置図（1：2,500）	2
図 2	調査前全景（北東から）	3
図 3	調査風景	3
図 4	基本層位図 北壁断面（1：40）	4
図 5	石垣149・石垣151・石垣150実測図（1：40）	8
図 6	土壌158・土壌159実測図（1：40）	10
図 7	土壌145・石垣143c断面図（ $Y=-21,794.10$ ライン）（1：40）	11
図 8	建物240実測図（1：40）	13
図 9	井戸218実測図（1：40）	15
図10	井戸210実測図（1：40）	15

図11	建物237実測図(1:60)	16
図12	建物215実測図(1:40)	17
図13	出土土器実測図1(1:4)	21
図14	出土土器実測図2(1:4)	23
図15	出土軒瓦拓影・実測図(1:4)	25
図16	出土木製品実測図(121~134 1:4、135~145 1:10)	26
図17	庭石136・庭石219実測図(1:40)	29
図18	池200洲浜第5面(北西から)	29
図19	遺構変遷概要図(1:500)	30
図20	『洛中洛外図』に描かれた二条殿	31

## 表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	19

# 平安京左京三条三坊十町（押小路殿・二条殿）跡

## 1．調査経過

京都市中京区両替町通御池上る金吹町に所在する京都労働基準局で、新庁舎建設工事が計画された。当地は烏丸御池遺跡・平安京跡・二条殿御池城跡にあっていることから、京都市埋蔵文化財調査センターの指導により発掘調査を実施することとなった。

調査は財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当することとなり、発掘調査に先立ち2001年9月17日から21日にかけて、既存建物基礎部分の撤去工事に伴う立会調査を行った。立会調査の結果、既存建物建設に伴う攪乱は地表下約2.5mまでで、江戸時代中期以降の包含層にとどまっていることが確認でき、江戸時代前期以前の遺構は下層に良好な状態で遺存していることが推定できた。

発掘調査は、重機掘削を2001年10月15日から23日まで行ったのち、遺構調査を2001年11月1日から開始した。調査区は現地事務所や作業用スペース、隣接する家屋との関係を考慮して、敷地に沿った長方形に設定した。調査では遺跡を第1面から第6面に分けて、順次掘り下げ、精査を行った。各調査面の精査では写真・図面の記録を採るとともに遺物を採集し、最後に断割り調査により下層の堆積状況を確認したのち、2002年4月12日にすべての調査を終了した。排土はすべて調査区外へ搬出した。

なお、調査中の2002年3月7日に報道発表を行い、3月9日には現地説明会（参加者約500名）を開催し、調査成果の公開に努めた。

## 2．遺跡の位置と環境

### （1）位置と環境

調査地は京都のオフィス街・烏丸通と御池通の交差点北西側に位置する。地理的には鴨川が形成した北から南へ緩やかに傾斜する扇状地上にあたるが、周辺は烏丸通や御池通に面して林立するビルと木造家屋が混在する環境にあり、現状から旧地形の詳細をうかがうことは難しい。

調査地は烏丸御池遺跡・平安京跡・二条殿御池城跡にあっており、周辺の歴史的状況は次のように概観することができる。

烏丸御池遺跡は平安京造営前の縄文時代から飛鳥時代にわたる集落遺跡で、竪穴住居や流路などの遺構や縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などの遺物が採集されている。

また、調査地は平安京の条坊復元では左京三条三坊十町にあたる。周辺には有力な皇族や貴族の邸宅が数多く営まれており、十町には平安時代中期に後朱雀天皇皇后・陽明門院禎子内親王の邸宅、平安時代後期には参議・藤原範光の邸宅、鎌倉時代には後鳥羽上皇の御所の一つであった

押小路殿があったことが文献に記されている。

承久の乱で後鳥羽上皇が隠岐へ流された後、この地は藤原道家を経て二条良実の所有となり、それ以降、室町時代末期まで藤原氏二条家の本邸・二条殿として受け継がれた。二条殿は邸内の庭園が有名で洛中洛外図にもその様子が描かれている。中でも庭園の池は「龍躍池」と命名され、調査地のある龍池学区の名称の由来となった。

安土桃山時代には織田信長が二条家を立ち退かせ、京都での拠点として二条殿跡御池城を造営した。この屋敷は二条屋敷とも呼ばれ、後に正親町天皇の皇子・誠仁親王に進上されたが、本能寺の変に当たっては織田信忠がこの地で自刃したと伝えられている。そして、江戸時代には両替町通に沿って、江戸幕府により金座・銀座・朱座が設けられた。

## (2) 周辺の調査

調査地周辺でのこれまでの主要な調査の概要を述べる。

左京三条三坊七町では南部中央の発掘調査(図1-1)で、古墳時代の遺物包含層、平安時代後期の南北溝・柱穴、鎌倉時代から室町時代の土壌などが検出された<sup>1)</sup>。その北側の立会調査(図1-2)では、平安時代後期の柱穴、鎌倉時代から江戸時代の池、江戸時代前期の土壌・溝などが検出された<sup>2)</sup>。また、南西部の立会調査(図1-3)では、平安時代後期の土壌、室町時代の桶を用いた木棺墓・土壌、江戸時代の土壌などが検出された<sup>3)</sup>。北西部の立会調査(図1-4)では鎌倉時代から室町時代の湿地状の落込みなどが検出された<sup>4)</sup>。

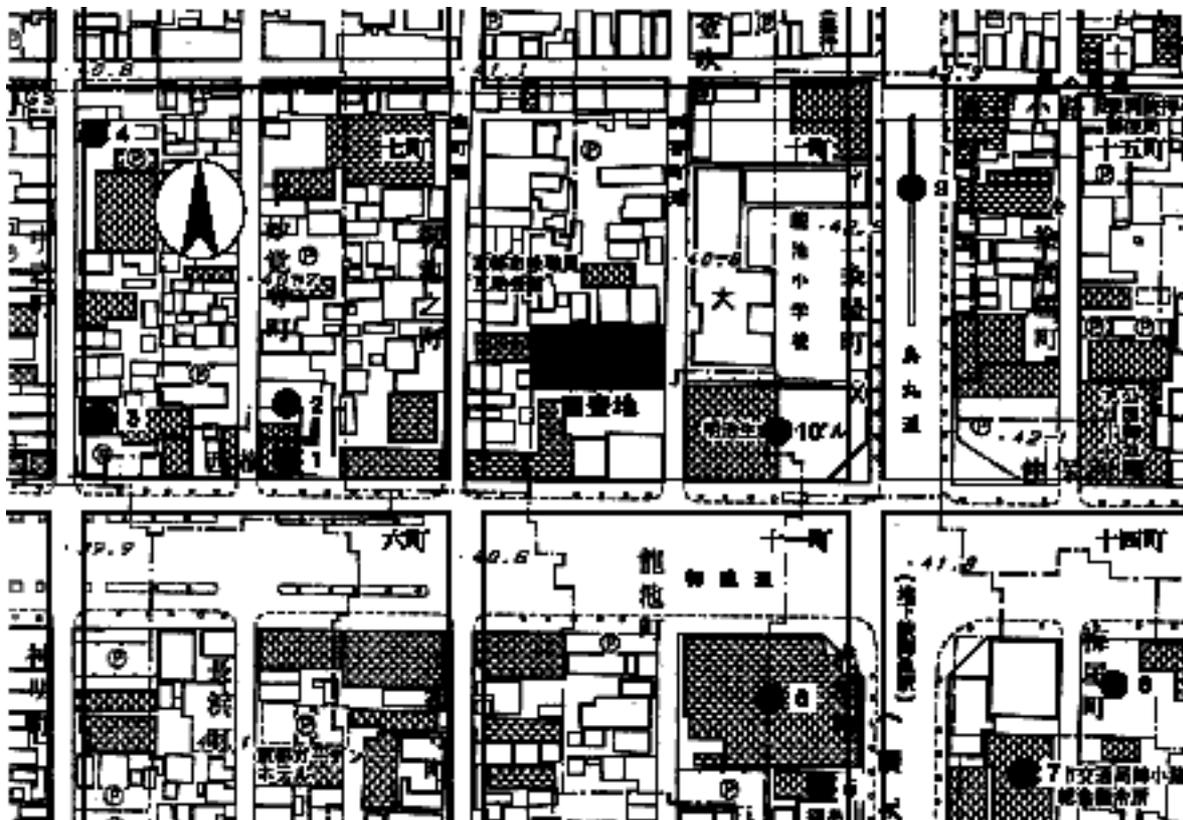


図1 調査地位置図(1:2,500)

九町では北東部の発掘調査で、平安時代前期の井戸、平安時代後期の井戸・柱穴、鎌倉時代の土壇、室町時代の井戸・柱穴・土壇、桃山時代の溝・井戸・柱穴・土壇、江戸時代前期の溝・井戸・柱穴・石室・土壇などが検出された。<sup>5)</sup>

十一町では東部中央の発掘調査（図1-5）で、平安時代中期の烏丸小路西側溝・井戸、鎌倉時代の土壇、室町時代の溝・井戸・土壇、江戸時代前期の井戸・土壇などが検出された。<sup>6)</sup> その北側の発掘調査（図1-6）では、平安時代中期の烏丸小路西側溝・門・土壇、平安時代後期の溝・井戸、鎌倉時代の土壇、室町時代の井戸・土壇墓・火葬墓、江戸時代前期の溝・井戸などが検出された。<sup>7)</sup> また、南西部の試掘調査では平安時代中期の井戸、鎌倉時代の南北溝、室町時代の土壇などが検出された。<sup>8)</sup> 南東部の試掘調査では、平安時代中期の烏丸小路西側溝などが検出された。<sup>9)</sup>

十四町では中央部の発掘調査（図1-7）で、平安時代後期の柱穴・土壇、鎌倉時代の柱穴、室町時代の南北溝・土壇、桃山時代の柱穴・土壇、江戸時代前期の土壇などが検出された。<sup>10)</sup> 北東部の発掘調査では、鎌倉時代から室町時代の溝・井戸、室町時代の東洞院大路路面と西側溝、溝などが検出された。<sup>11)</sup> 北部中央の発掘調査（図1-8）では、平安時代中期の溝、鎌倉時代の溝・土壇・柱穴、室町時代の溝・井戸・土壇、江戸時代前期から中期の建物・井戸・土壇などが検出された。<sup>12)</sup>

十五町では北西部の発掘調査（図1-9）で、江戸時代前期の井戸・土壇、桃山時代の土壇、室町時代の溝などが検出された。<sup>13)</sup>

十六町では北西部の発掘調査で、平安時代後期の井戸、鎌倉時代から室町時代の二条大路南側溝・柱穴・土壇、桃山時代の柱穴・土壇、江戸時代前期の建物・井戸土壇などが検出された。<sup>14)</sup> その西側の発掘調査では、鎌倉時代の土壇、室町時代の二条大路南側溝、江戸時代前期の建物などが検出された。<sup>15)</sup> 西部中央の発掘調査では、平安時代中期の土壇、室町時代の土壇などが検出された。<sup>16)</sup>

今回発掘調査を行った左京三条三坊十町内では南東部（烏丸御池交差点北西角）で3次の発掘調査（図1-10）が行われ、平安時代後期の烏丸小路西側溝・井戸、鎌倉時代の烏丸小路西側溝・井戸、室町時代の溝・井戸・柱穴・土壇、江戸時代の石垣・溝・池・井戸・石室・柱穴・土壇などの遺構が検出された。<sup>17)</sup>



図2 調査前全景（北東から）



図3 調査風景

### 3. 遺 構

#### (1) 層序と遺構の概要

層序(図4) 調査地の層序は遺構が重複する平安京左京域特有の堆積を示している。特に調査地には後述する庭園や石垣が構築されていたため、状況はより複雑であった。

調査地には地表面から約1.4mの厚さで盛土が堆積しており、その下層は調査区東部と西部で様相を異にする。調査区東部では盛土の下に約0.2~0.4mの厚さの室町時代から江戸時代前期の包含層があり、その下は地山の褐色・黄褐色粘質土である。一方、調査区西部は盛土の下に、大きく分けて江戸時代中期以降の包含層・桃山時代から江戸時代前期の包含層・鎌倉時代から室町時代の整地層・地山の褐色砂礫の順で堆積していた。江戸時代中期以降の包含層は、約0.8~1.0mの厚さがある。面的な広がりはなく、中には火災後の片付けをした土壌も含まれていた。桃山時代から江戸時代前期の包含層も面的な広がりはなく、遺構群の重なりとして堆積していた。厚さは東寄りでは約0.6mであるが、西寄りでは石垣が構築されていたことにより約1.6~1.8mとかなり分

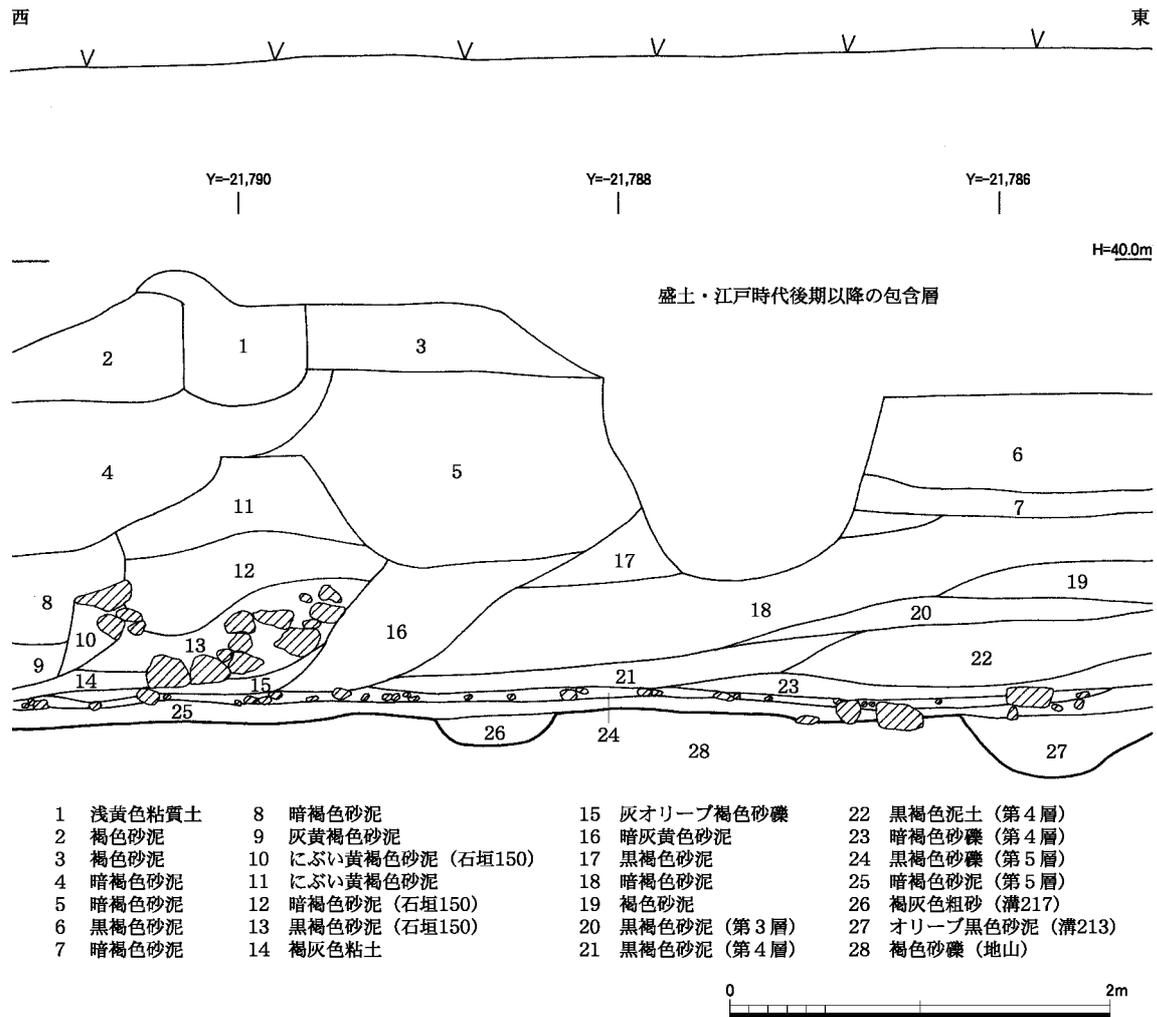


図4 基本層位図 北壁断面(1:40)

表 1 遺構概要表

時 期	遺 構
平安時代～室町時代	井戸・建物・池・庭石・石組・土壇・柱穴
桃山時代～江戸時代	石垣・井戸・土壇・柱穴
江戸時代後期	建物・柵・井戸・石室・土壇・柱穴

厚くなっている。鎌倉時代から室町時代の整地層は庭園の整備にともなうもので、少なくとも3回にわたって整地が行われていたことが分かった。厚さは調査区西端では約0.1mであるが、東に向かって徐々に厚くなり、東寄りのもっとも分厚い部分では約1.6mにもなる。

地表面から地山までの深さは、調査区東部では約1.6m、調査区西部では約3.6mになる。この高低差は庭園の形状に起因するものであり、庭園が作り替えられる過程で徐々に緩やかな斜面となって解消され、江戸時代前期には約0.8mの段差として残されていたことが観察できた。調査地で東部と西部の高低差がなくなるのは近代以降である。

遺構の概要 発掘調査は遺跡を第1面から第6面の6段階に分け実施した。第1層の上面を第1面、第2層の上面を第2面、第3層の上面を第3面、第4層の上面を第4面、第5層の上面を第5面、地山直上の遺構面を第6面とした。各遺構面は層序の状況でも述べたように、基本的に東から西に向かって傾斜している。第1面が江戸時代前期から後期、第2面が桃山時代から江戸時代初頭、第3面から第5面が室町時代、第6面が平安時代中期から鎌倉時代の遺構面にあたる。第3面から第6面は押小路殿・二条殿の庭園の遺構、第1面・第2面は二条殿廃絶ののち、市街地となった時期の遺構である。なお、平安時代中期をさかのぼる時期の遺構は検出していない。

検出した遺構の総数は241基になる。以下では遺跡を理解する上で重要と判断した遺構を検出面ごとに報告する。なお、各検出遺構および出土遺物の時期の判定は、平安京・京都<sup>18)</sup>期～戦期の編年案を準用する。

## (2) 第1面の遺構 (図版1・7)

第1面は、Y=-21,775m付近で西に落ち込み、約0.8mの段差を形成している。東部は井戸・小規模な土壇・柱穴が多く分布する。これに対して、中央部・西部は井戸・大規模な土壇が多く、遺構数は少ない。

柵238 北東部で検出した東西方向の柵である。東側・西側へさらに延びていた可能性がある。検出した柱穴は6基で、残存する長さは約4.5mである。柱穴は直径約0.4～0.7m、深さ約0.2～0.3mである。東側の2基には大きさ約30～40cmの平坦な石を据える。西側の4基は掘立柱で、柱あたりは直径約15cmである。柱穴の間隔は約0.8～1.0mである。建物の一部である可能性もある。期の遺物が出土した。

石室97 中央部で検出した。北側は既存建物のコンクリート杭により攪乱を受け、部分的に変形している。掘形は直径約1.5mの円形で、深さは約0.7mである。底部から大きさ約10～20cmの

河原石を小口面を内側に向けて円形に積み上げる。内法は約0.8mの円形に復元できる。Ⅲ期～Ⅳ期の遺物が出土した。

建物10 中央部からやや西側で検出した。規模は東西約11.6m、南北約7.1mの長方形で、縁には「口」字形に幅約0.9～1.2mの溝がめぐる。西辺の溝は深さ約1.0～1.2mで、底部から大きさ約40～50cmの大型の河原石や花崗岩の割石を、小口面を外側にそろえて5段以上積み上げ、裏込めには大きさ約10～30cmの石を詰める。南辺の溝は深さ約0.8～1.0mで、西半は西辺の溝と同様に底部から大型の河原石や花崗岩の割石を積み上げるが、東半は石材を使用しない。東辺の溝は部分的に石室97により攪乱を受けるが、深さ約0.4～0.6mで、南半は底部に大きさ約10～30cmの河原石を乱雑に並べる。加工痕のある石材も2点含んでいる。また、南東隅の石材は大きさ約70cmの大きな花崗岩である。北半は石材を使用しない。北辺の溝は深さ約0.5mで、石材は使用しない。溝に囲まれた内側は約0.2～0.3mの厚さで整地している。大型の土蔵の基礎で、溝の部分に壁が立ち上がっていたと考えられる。Ⅲ期中段階～Ⅳ期の遺物が出土した。

土壌27 建物10の中央で検出した。東西約6.0m、南北約2.2mの不整形な平面形で、深さは約0.5mである。Ⅲ期の遺物とともに、庭石が1点出土した。長径約90cm、短径約70cm、高さ約50cmで、重さは約400～450kgである。材質はチャートで、色調は白色で濡れると鮮やかな灰緑色を呈する。

土壌11 南西部で検出した。平面形は南北約5.5m、東西4.2m以上の方形で、深さは約1.2～1.3mである。Ⅲ期～Ⅳ期の遺物とともに、庭石が1点出土した。長径約90cm、短径約90cm、高さ約30cmで、重さは約400～500kgである。材質はチャートと苦灰岩(?)の互層構造で、色調はチャートの部分が灰色、苦灰岩(?)の部分が緑色を帯びた灰色である。

### (3) 第2面の遺構(図版2・8・9)

第2面は、調査区のほぼ東西中心、Y=-21,780m付近で大きく様相を異にする。東部は井戸・土壌・柱穴が少数分布するのみで西に向かって緩やかに傾斜する。これに対して、西部は石垣や地下収蔵施設が合わさった複雑な状況を示す。

井戸112 北東部で検出した石組の井戸である。北側は調査区外になるが、掘形は東西約2.1m、南北1.8m以上の円形である。壁際であったため掘り下げは検出面から深さ1.4mにとどめた。大きさ約30～40cmの河原石を、小口面を内側に向けて垂直に円形に積み上げる。内径は約0.9mの円形である。裏込めには大きさ数cm～約10cmの河原石を詰める。Ⅲ期の遺物が出土した。

井戸116 南東部で検出した。掘形は直径約1.7mの円形である。深さは検出面から約2.4mで、底部の標高は36.8mである。底部付近には内法約0.8m、高さ0.5m以上の桶を据え付けた痕跡が残っていたが、上半部の井戸枠が残存していないため正確な構造は不明である。また、底部中央には大きさ約40cmの石が平坦な面を上に向けて据えてあった。Ⅲ期中段階～Ⅳ期新段階の遺物が出土した。

石垣149(図5) 中央部南側で検出した西面する南北方向の石垣である。北から約10°西へ振

る方位をとる。検出した長さは約5.6mで、北側は約110°の鈍角で屈曲して石垣151につながり、南側は調査区外へ延びる。一部は建物10南辺の溝により攪乱を受けるが、残存高は約0.5～0.8mである。大きさ約20～70cmの石を3段以上積み上げる。石材は花崗岩の割石が多くを占め、他に砂岩・チャートを用いる。また、石臼の破片も1点含まれていた。掘形は幅約1.3m、深さ0.8m以上で、隙間や裏込めには大きさ数cm～約30cmの河原石を詰める。期中段階～新段階の遺物が出土した。

石垣151(図5) 中央部で検出した南面する東西方向の石垣である。北から約80°西へ振る方位をとる。検出した長さは約4.6mで、東側は石垣149につながる。西側は建物10により攪乱を受けるが、屈曲して石垣150につながると推定できる。残存高は約0.5mで、大きさ約20～50cmの石を3段以上積み上げる。石材は花崗岩の割石が多くを占め、他に砂岩・粘板岩・チャート・凝灰岩を用いる。また、石仏の破片と加工痕のある石材が1点ずつ含まれていた。凝灰岩には加工痕はない。掘形は幅約1.1m、深さ0.5m以上で、隙間や裏込めには大きさ数cm～約20cmの河原石のほか平安時代の瓦片を非常に密に詰める。期中段階～新段階の遺物が出土した。

石垣150(図5) 北西部で検出した西面する南北方向の石垣である。検出した長さは約4.5mで、北側は調査区外へ延び、南側は石垣151につながると推定できる。残存高は約0.3～0.4mで、大きさ約20～50cmの石を2段以上積み上げる。石材は花崗岩の割石が多くを占め、他に砂岩・チャートを用いる。掘形は幅約0.8m、深さ0.4m以上で、隙間や裏込めには大きさ数cm～約20cmの河原石を詰める。期中段階～新段階の遺物が出土した。

石垣161 中央部南壁際で検出した東西方向の石垣である。北面する部分の石は面がそろっていないため南面する石垣である可能性があるが、壁際であったため掘り下げて確認は行っていない。検出した長さは約2.4mで、東側は約80°の鋭角で石垣149に取り付く。西側は土壌159により途切れる。残存高は約0.6mで、大きさ約20～50cmの石を3段以上積み上げる。石材は花崗岩の割石が多くを占め、他に砂岩・チャートを用いる。掘形は不明である。隙間には大きさ数cm～約20cmの河原石を詰めるが、積み方は乱雑である。期中段階～新段階の遺物が出土した。

石垣148a 南西部で検出した西面する南北方向の石垣であるが、最下部を残すのみである。検出した長さは約1.0mで、北側は建物10南辺の溝により攪乱を受け、南側は土壌159に取り付くと推定できる。残存高は約0.2mで、大きさ約30～50cmの石を2段以上積み上げていたと推定できる。掘形は幅約0.8mで、深さは0.2m以上である。隙間や裏込めには大きさ数cm～約20cmの河原石を詰める。埋土の観察から石垣149よりも後に構築されたことが判明した。石垣151との関係は不明である。期中段階～新段階の遺物が出土した。

石垣148b 南西部で検出した西面する南北方向の石垣であるが、最下部を残すのみである。検出した長さは約1.5mで、北側は建物10南辺の溝により攪乱を受け、南側は土壌159に取り付く。残存高は約0.2mで、大きさ約30～50cmの石を2段以上積み上げていたと推定できる。掘形は不明である。隙間や裏込めには大きさ数cm～約20cmの河原石を詰める。石垣148aと同様、埋土の観察から石垣149よりも後に構築されたことが判明した。石垣151との関係は不明である。期中段

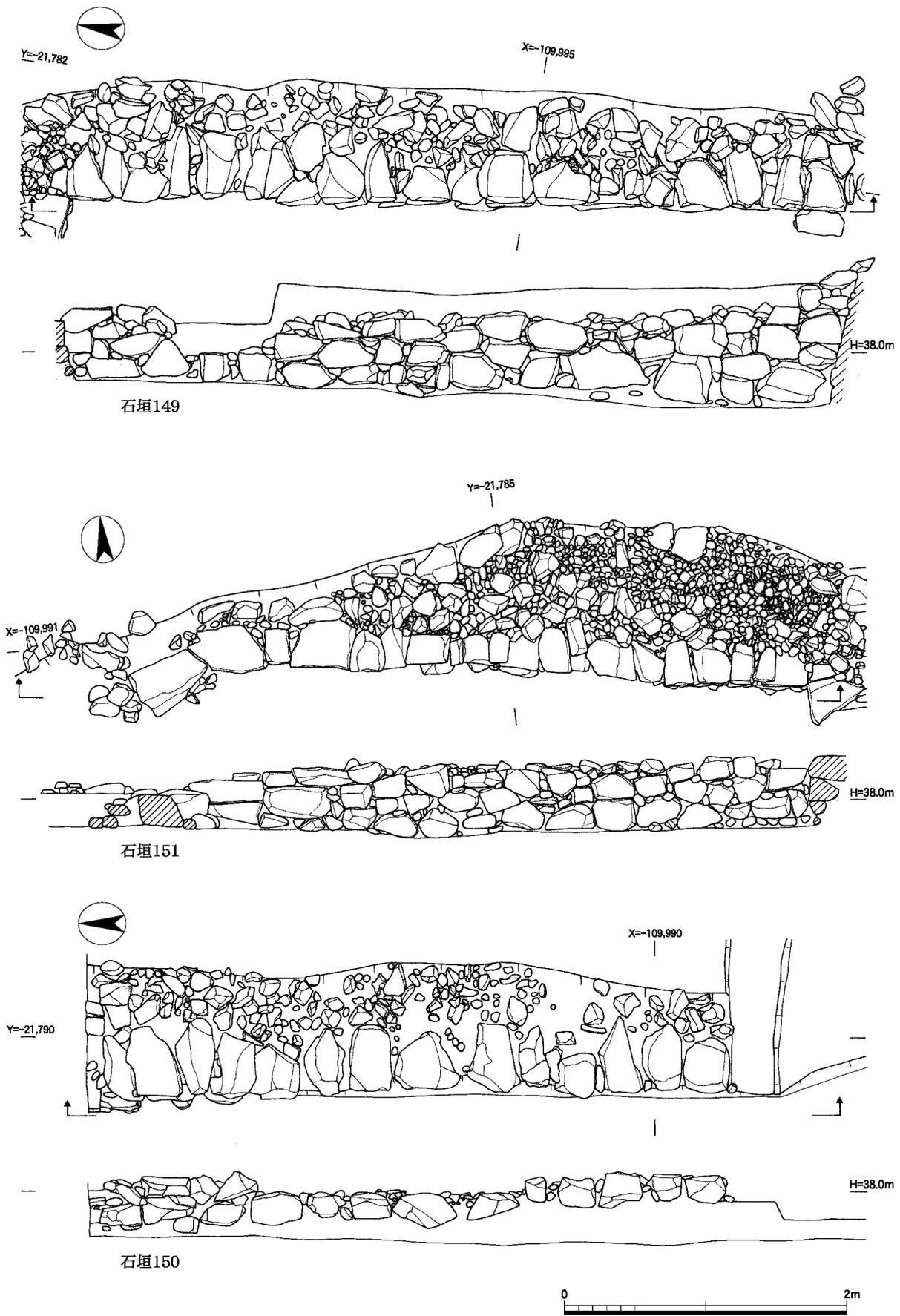


图5 石垣149・石垣151・石垣150実測図(1:40)

階～新段階の遺物が出土した。なお、石垣148aと石垣148bの間には大きさ約30～40cmの石を平坦な面を上にして2基据えているが、礎石として用いられたかは不明である。

石垣143a 南西部で検出した西面する南北方向の石垣である。検出した長さは約1.6mで、北側は建物10南辺の溝により攪乱を受け、南側は土壌159に接する。残存高は約0.6mで、大きさ約20～50cmの石を4段以上積み上げる。石材は花崗岩の割石が多くを占め、他に砂岩を用いる。掘形は幅約0.6m、深さ0.6m以上で、隙間や裏込めには大きさ数cm～約20cmの河原石を詰める。土壌159に接する部分には石垣143bも取り付いており、埋土の観察からこれらが一連の工程で構築されたことが分かった。石垣151との関係は不明である。 期中段階～新段階の遺物が出土した。

石垣143b 南西部で検出した北面する東西方向の石垣であるが、最下部を残すのみである。検出した長さは約2.5mで、西側は土壌11により攪乱を受け、東側は石垣143aに取り付く。残存高は約0.2～0.3mで、大きさ約20～40cmの石を2段以上積み上げていたと推定できる。石材は砂岩が多くを占め、他に花崗岩の割石・チャートを用いる。掘形は幅約0.6～0.8m、深さ0.3m以上で、隙間や裏込めには大きさ数cm～約20cmの河原石を詰める。土壌158との間は堅く締まった黄褐色粘土・緑灰色粘土を充填する。 期中段階～新段階の遺物が出土した。

石垣143c(図7) 北西部で検出した南面する東西方向の石垣である。検出した長さは約3.8mで、東側は建物10西辺の溝により攪乱を受け、西側は石垣143dに取り付く。残存高は約0.4～0.7mで、大きさ約20～50cmの石を4段以上積み上げる。石材は花崗岩の割石が多くを占め、他に砂岩・チャートを用いる。掘形は幅約0.5～0.8m、深さ0.6m以上で、隙間や裏込めには大きさ数cm～約20cmの河原石を詰める。土壌145との間は堅く締まった黄褐色粘土・緑灰色粘土・暗緑灰色粘土を充填しており、これらが一連の工程で構築されたことが分かった。 期中段階～新段階の遺物が出土した。

石垣143d 西壁際で検出した東面する南北方向の石垣である。検出した長さは約7.5mで、南側は土壌11により攪乱を受け、北側は調査区外へ延びる。また、調査区北西部で石垣143c・土壌145が取り付く。残存高は約0.7mで、大きさ約20～40cmの石を4段以上積み上げる。石材は花崗岩の割石が多くを占め、他に砂岩・チャートを用いる。掘形は壁際であったため完掘していないが、隙間や裏込めには大きさ数cm～約20cmの河原石を詰める。土壌145は石垣143dの一部を崩して構築されている。 期中段階～新段階の遺物が出土した。

石垣143e 西部で検出した石段状の遺構である。東側は建物10西辺の溝、南側は土壌11により攪乱を受けているが、南北1.5m以上、東西1.8m以上の方形であったと推定できる。黒褐色砂泥を積み上げ、西と北に面を向けて大きさ約30～50cmの石を並べる。石材は花崗岩の割石・砂岩・チャートを用いる。1段目・2段目とも高さ約15～20cmで、全体では約30cmの高まりとなる。裏込めには石を用いない。他の遺構との関係は不明で、遺物も出土していないが、石垣143a・石垣143b・石垣143c・石垣143dを埋めた埋土下部で検出したので、一連の遺構と推定できる。

土壌158・159(図6) 南壁際で検出した。土壌158と土壌159の間は板により仕切られていたが、一連の遺構と考えられる。西側は土壌11により攪乱を受け、南側は壁に接するが、平面形は

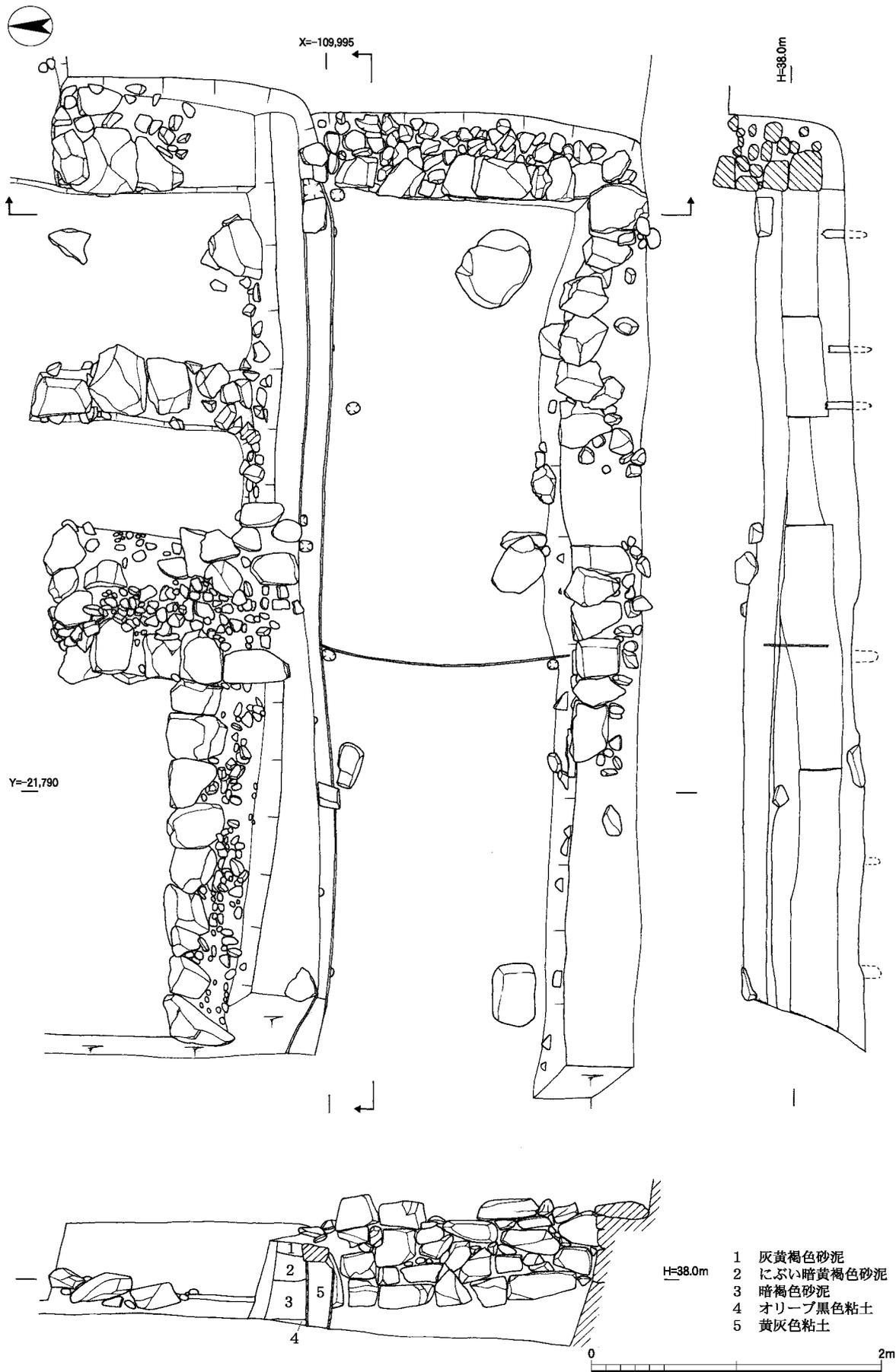


図6 土壙158・土壙159実測図(1:40)

南北約2.6m、東西6.8m以上の方形で、深さは約1.0mである。

東壁と南壁は石垣状に大きさ約20～40cmの石を4段以上積み上げる。ただし、石の積み方は乱雑で隙間が多く、不安定である。石材は花崗岩の割石が多くを占め、他に砂岩・チャートを用いる。また、石仏の破片と五輪塔火輪も1点ずつ含まれていた。東壁の掘形は幅約0.6m、深さ0.8m以上で、隙間や裏込めには大きさ数cm～約20cmの河原石を詰める。南壁は壁際であったため完掘していない。南東角では東壁と南壁の石が交互に重なっているため、2面の壁が同時に構築されたことが分かる。

北壁は2重の板壁である。外側と内側の板壁の間隔は約10cmで、間を大きさ約10～20cmの河原石と黄褐色粘土で充填する。板壁の構造は外側・内側とも同じで長さ約70～170cm、幅約30～40cmの板を2段に重ねる。板材の樹種はモミで大部分が腐って損傷していたが、もっともよく残っていた部分で厚さ約3cmある。それぞれの板壁の内側には板を固定するために直径約5～10cmの杭を打ち込んでいた。杭の間隔は不揃いである。検出時点では、板壁は内傾していたが、本来は垂直であったと推定できる。また、外側の板壁と石垣143a・石垣143bとの間は堅く締まった黄褐色粘土・緑灰色粘土を充填しており、これらが一連の工程で構築されたことが分かった。

壁に囲まれた内法は南北約1.6m、東西6.2m以上である。土壌158と159を仕切る板は長さ約160cm、幅約40cmの一枚板である。大部分が腐って損傷しており、厚さおよび樹種は不明である。板の両側には板を固定するために直径約5～10cmの杭を打ち込んだ痕跡が残っていた。南壁際の床には大きさ約40～60cmの大型の石を平坦な面を上にして3基据える。石の間隔は西側が約3.0m、東側が約2.3mである。また、対応する位置の北壁床直上部でも大きさ約20～30cmの石を平坦な面を上にして3基据える。これらは礎石であったと考えられ、上部に構造物があったことは確実であるので、地下収蔵施設と考えた。 期中段階～新段階の遺物が出土した。

土壌145(図7) 北西隅で検出した。北側は調査区外になるが、平面形は南北1.6m以上、東西約5.1mの方形で、深さは約1.0mである。西壁は石垣143dを利用している。

南壁は2重の板壁である。南西角では石垣143dの一部を崩している。外側と内側の板壁の間隔は約10cmで、間を暗灰黄色粘土・黄褐色粘土で充填する。また、一辺約10cmの角材を嵌めた痕跡が1箇所ある。内側の板壁の構造は長さ約80～140cm、幅約40cmの板を2段に重ねる。大部分が腐って損傷しており、厚さおよび樹種は不明である。また、外側の板壁は板の痕跡をとどめるのみであった。それぞれの板壁の内側には板を固定するために直径約5～10cmの杭を打ち込んでい

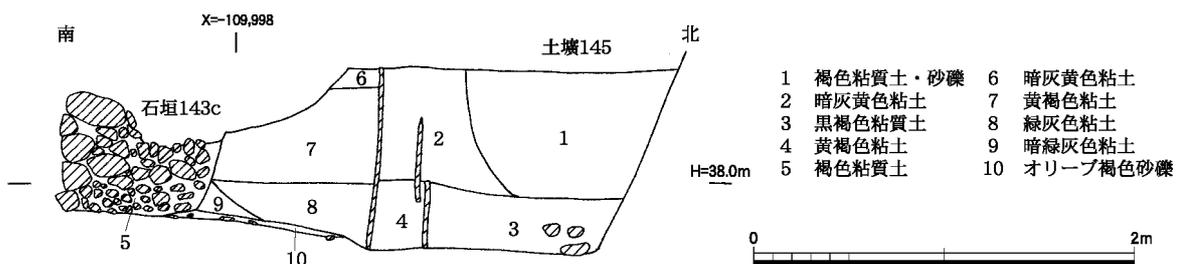


図7 土壌145・石垣143c断面図(Y=-21,794.10ライン)(1:40)

た。杭の間隔は不揃いである。外側の板壁と石垣143cとの間は堅く締まった黄褐色粘土・緑灰色粘土・暗緑灰色粘土を充填しており、これらが一連の工程で構築されたことが分かった。

東壁は建物10西辺の溝により攪乱を受け、最下部を残すのみである。残存高は約0.4mで、大きさ約30～50cmの石を2段以上積み上げていたと推定できる。石材は花崗岩の割石を用いる。掘形は幅約0.8m、深さ0.5m以上で、南東隅は南壁外側の板壁と石垣150西面に立てた板を直角に組合せ、石材との隙間を大きさ数cm～約20cmの河原石と黄褐色粘土で充填する。また、内側の板壁から約20cm北側に別の板を立てる。これらの板も痕跡をとどめるのみであった。充填した粘土が石垣150の隙間にも入り込んでいることから、石垣150よりも後に構築されたことが判明した。

壁に囲まれた内法は南北1.3m以上、東西約3.6mである。南壁際床面には礎石と考えられる大きさ約40cmの石を平坦な面を上にして1基据える。土壌145は土壌158・159と構造が近似するので、同様の地下収蔵施設と考えた。期中段階～新段階の遺物が出土した。

#### (4) 第3面の遺構(図版3・10)

第3面は、調査区東部では平坦で建物・土壌・柱穴が分布するのに対して、中央部・西部は西に向かって傾斜する庭園遺構となる。

建物239 北東部で検出した。検出した柱穴は東西方向に並ぶ4基で、残存する長さは約5.8mである。柱穴は直径約0.5～0.6m、深さ約0.2～0.3mである。中央の2基には大きさ約30cmの平坦な石を据える。他の2基は柱あたりの痕跡を認めなかったが掘立柱であったと推定できる。柱穴の間隔は約1.8～2.0mである。北側は調査区外になるため不明である。また、柱穴はさらに東側へ延びていた可能性がある。少量であるが期の遺物が出土した。

土壌126 東部で検出した。南北約3.4m、東西約3.6mの不整形な平面形で、深さは約0.5mである。期の遺物が出土した。

土壌127 東部壁際で検出した。東側と西側は攪乱されるが、南北約1.8m、東西2.1m以上の不整形な平面形で、深さは約0.3mである。期新段階の遺物が出土した。

土壌139 北東部で建物239の下層で検出した。北側は調査区外にある。南北4.2m以上、東西約1.6～3.6mの不整形な平面形で、深さは約0.2mである。期中段階～新段階の遺物が出土した。

庭石136(図17) 北東部の建物239南西隅に接する位置で検出した。長径約80cm、短径約60cm、高さ約30cmで、重さは約150～200kgである。材質は砂岩で、色調は青灰色を呈する。掘形は直径約1.0mの円形で、深さは約0.5mである。上半部には大きさ数cm～約30cmの根石を詰める。少量であるが期～期の遺物が出土した。

庭石154 中央部で検出した。長径約110cm、短径約80cm、高さ約70cmで、重さは約450～500kgである。材質はチャートで、色調は青黒色を呈する。約3分の1が地中に埋められていたが、掘形は確認できていない。

庭石153 中央部で庭石154と並んで検出した。土壌27により一部が割り取られている。残存する大きさは長径約70cm、短径約20cm、高さ約50cmで、重さは約50～100kgである。材質は砂岩で、

色調は灰色を呈する。約2分の1が地中に埋められていたが、掘形は確認できていない。

池200 第3面は庭石136の西側から西に向かって傾斜し、庭石154・庭石153付近でいったん平坦になったのち、さらに西に向かって落ち込み、池200となる。

汀は、南側が石垣149・石垣151により攪乱を受けていたが、北側は調査区外へ延びる。検出した長さは約5.0m、幅約1.8mで、北西から南東に向かって緩やかに湾曲する。汀の傾斜は約15°で、白砂や大きさ約1～5cmの小石を疎らに敷いて洲浜を作る。池は南西側へ向かって調査区外に広がる。池の底部はほぼ平坦で、わずかに南西に向かって傾斜する。洲浜の下層は第3層の整地層、池の底は褐色砂礫層で、粘土などを貼った痕跡は認めていない。東部の平坦面と池底の高低差は、約2.0mである。遺物はほとんど出土しなかった。

#### (5) 第4面の遺構(図版4・10・11)

第4面も第3面と同様、調査区東部は平坦で建物・土壇・柱穴が分布するのに対して、中央部・西部は西に向かって傾斜する庭園遺構となる。東部の平坦面部分は地山面になる。第3層の厚さは池200の洲浜部分で約0.05～0.2m、最も分厚いところで約0.3mである。第3層からは 期～ 期の遺物が出土したが、なかでも 期～ 期の遺物が多くを占める。

建物240(図8) 北東部で検出した。検出した柱穴は東西方向に並ぶ3基で、残存する長さは約3.5mである。北から約85°東へ振る方位をとる。柱穴は直径約0.6～0.7m、深さ約0.5mである。いずれの柱穴の底部にも大きさ約40cmの大型の石を平坦な面を上に向けて据える。東側の2基は第3面の建物239の柱穴と重複しており、礎石を重ねていた。柱穴の間隔は約3.0～3.2mである。北側は調査区外になるため不明である。また、柱穴はさらに東側へ延びていた可能性がある。礎石の重なりから建物240を建て替えて建物239を構築したことが判明した。少量であるが 期の遺物が出土した。

土壇205 中央部北側で検出した。直径約0.6mの円形で、深さは約0.15mである。中央に直径約30cm、深さ約16cmの大和産の瓦器の火鉢を、口縁部を上に向けた状態で据える。火鉢の底部は

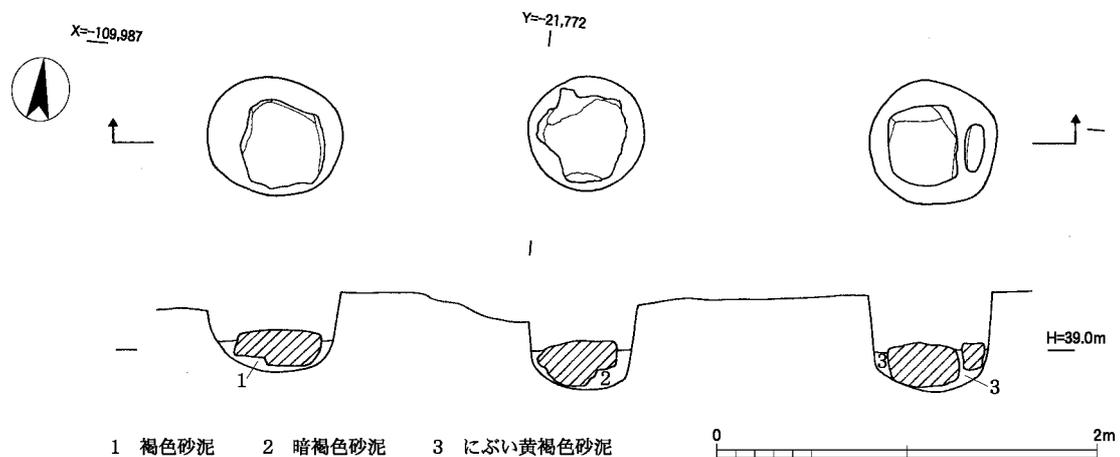


図8 建物240実測図(1:40)

2分の1が欠損しており、据え付けの植木鉢として使用されたと推定できる。 期の遺物が出土した。

池200 第4面は建物240の西側から西に向かって傾斜し、いったん平坦になったのち、さらに西に向かって落ち込み、池200となる。庭石はない。

汀は第3面と同様、南側が石垣149・石垣151により攪乱を受けていたが、北側は調査区外へ延びる。検出した長さは約5.2m、幅約0.6～1.6mで、北西から南東に向かって緩やかに湾曲する。汀の傾斜は約5°で、白砂のみを敷いて洲浜を作る。洲浜の下層は第4層の整地層で、粘土などを貼った痕跡は認めていない。池は南西側へ向かって調査区外に拡がり、池の底部は第3面と共通する。東部の平坦面と池底の高低差は、約1.9mである。遺物はほとんど出土しなかった。

#### (6) 第5面の遺構(図版5・11)

第5面も第3面・第4面と同様、中央部・西部は西に向かって傾斜する庭園遺構となるが、東部・中央部では遺構を検出していない。また、東部の平坦面から西への傾斜は第3・第4面よりも急になる。第4層の厚さは池200の洲浜部分で約0.05～0.3m、最も分厚いところで約0.5mである。第4層からは 期～ 期の遺物が出土したが、なかでも 期～ 期の遺物が大部分を占める。

庭石211 中央部北側で検出した。長径約130cm、短径約50cm、高さ約40cmで、重さは約200～250kgである。材質は頁岩～粘板岩で、色調は黒色を呈する。洲浜直上に据えられており、掘形は確認できていない。

池200(図18) 第4面はY=-21,774m付近からY=-21,776m付近の間で西に強く傾斜したのち、西に向かって緩やかに落ち込み、池200となる。

汀は西端は土塙10西辺の溝により攪乱を受けるが、北側・南側とも調査区外へ延びる。検出した長さは約13.2m、幅約0.6～1.6mで、北西から南東に向かって緩やかに湾曲する。汀は緩やかで、わずかに南西に向かって傾斜し、粗密はあるが大きさ約1～5cmの小石を敷き詰めて洲浜を作る。洲浜の下層は第5層の整地層で、粘土などを貼った痕跡は認めていない。池は南西側へ向かって調査区外に拡がり、池の底部は第3面と共通する。東部の平坦面と池底の高低差は、約1.9mである。遺物はほとんど出土しなかった。

#### (7) 第6面の遺構(図版6・12)

第6面は、Y=-21,773m付近で、地山を削り落として約1.1mの段差を形成し、急激に西に落ち込む。東部は2基の井戸のほか少数の柱穴が分布する。中央部・西部は西へ向かってわずかに傾斜する緩やかな平坦面になり、建物・庭石をともなう庭園遺構となる。第5層の厚さは薄いところで約0.1m、最も分厚いところで約0.6mである。第5層からは 期～ 期の遺物が出土した。特に下層は 期新段階～ 期古段階の遺物が多い。

井戸218(図9) 南東部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。西側は井戸210や地山を削り落とした際に攪乱を受けるが、掘形は南北約1.6m、東西1.6m以上の方形に復元することができ

る。深さは検出面から約1.5mで、底部の標高は37.3mである。井戸枠は内法一辺約1.0mの方形であったと推定できる。残存高は下端から約0.4mである。縦板は北面で1枚・東面で4枚・南面で2枚が残存しており、各面4枚であったと推定できる。縦板の隙間や外側は部分的に幅の狭い薄い板を重ねて補強する。横棧木は最下段のみが残存しており、両端に凹凸柄を作り、組み合わせる目違い柄組である。北東隅と南東隅には角柱がわずかに残存していた。底部は地山の砂礫層が露出し、特に水溜めは作っていない。 期古段階～中段階の遺物が出土した。

井戸210（図10） 南東部の井戸218の西側に接して検出した方形縦板横棧組の井戸である。地山を削り落とした際に大部分が攪乱を受けるが、掘形は南北約1.5m、東西約1.7mの方形に復元することができる。深さは検出面から約1.0mで、底部の標高は37.1mである。井戸枠は内法一辺約1.0mの方形であったと推定できる。残存高は下端から約0.2mである。縦板は東面で4枚が残存していたが、細部は不明である。部分的に外側に板を重ねて補強した痕跡がある。横棧木は西辺を除く最下段のみが残存しており、両端に凹凸柄を作り、組み合わせる目違い柄組である。角柱は残存しない。底部は地山の砂礫層を掘りくぼめて、中央に水溜めの曲物を据える。曲物は直径約55cm。高さ約26cmに復元することができる。少量であるが、 期新段階～期の遺物が出土した。

建物237（図11） 中央部北側で検出した東西棟の礎石建物である。中央部は溝213により攪乱を受けるが、南北約2.1m、東西約11.5mで、南北1間、東西6間以上と推定できる。柱穴は南東隅と南西隅のみ検出した。直径約0.5～0.6m、深さ約0.1mである。礎石は9基が残存し、大きさ約20～40cmの平坦な石を据える。また、礎石推定位置に大きさ約10cmの石を2個並べた所が1箇所ある。柱穴の間隔は南北約2.2m、東西は東から順に約2.0m、2.0m、1.0mであ

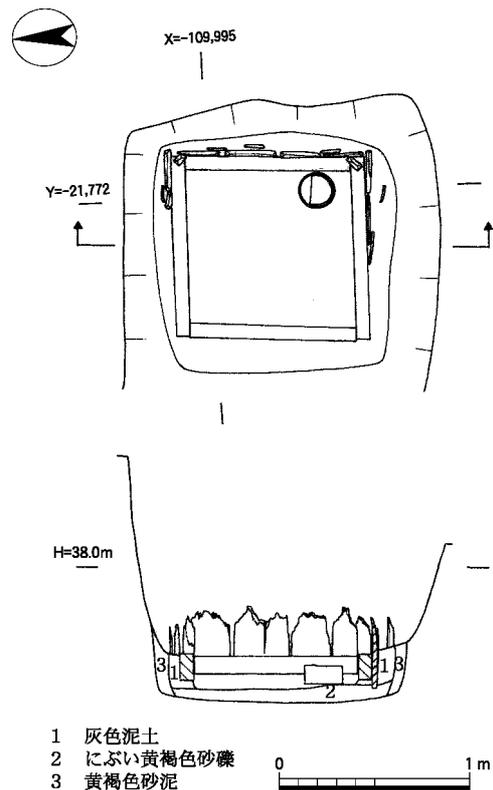


図9 井戸218実測図（1：40）

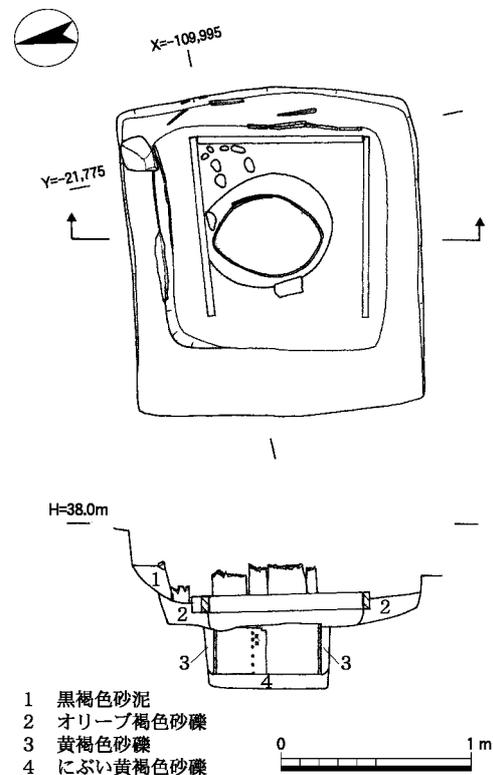


図10 井戸210実測図（1：40）

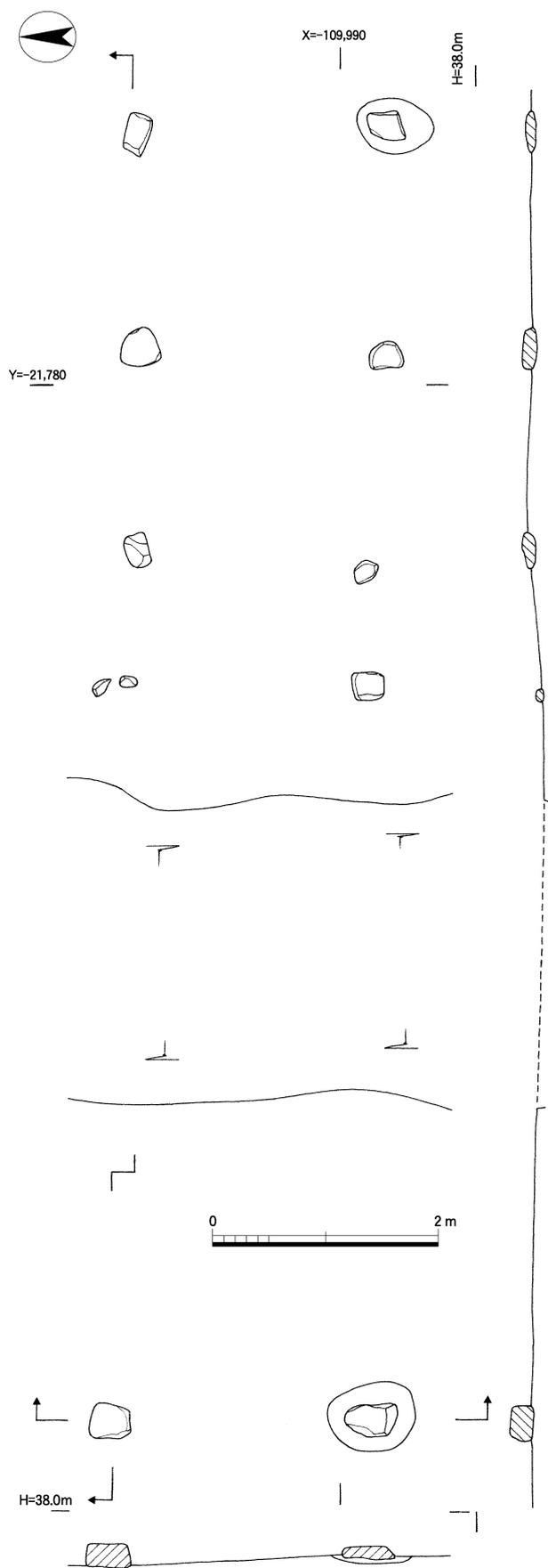


図11 建物237実測図(1:60)

る。建物の全長から東西方向の柱の間隔は2.0mを基調にしていたと推定できる。遺物は出土していない。

建物215(図12) 中央部で検出した建物である。南側は土壌により攪乱を受けるが、南北4.0m以上、東西約5.6mで、周囲に雨落溝を廻らせた建物と推定できる。西側は削平を受けているが、建物237の上を約0.1mの厚さで褐色砂泥・暗灰黄色粘質土の整地層で覆う。

建物237の礎石の直上に約10~15cmの厚さの角材を礎板として据えたところが2箇所ある。間隔は約2.0mである。西側の礎石上も同様に礎板が据えてあったと考えられる。東辺と北辺の雨落溝の際には縁束の柱穴が4基残存する。一辺約0.1~0.15mの方形で、深さは0.02~0.05mである。掘形はなく、角材を直に据えたと推定できる。柱穴の間隔は北東角部で約1.0m、東辺で約1.2mである。

雨落溝は東辺・北辺・西辺の一部に残存する。幅約0.3m、深さ約0.05~0.1mの断面方形で、両側に板を立てる。板は大部分が腐って損傷しており、厚さおよび樹種は不明である。西辺は板の痕跡をとどめるのみであった。雨落溝の内側には大きさ約20~30cmの河原石を一行に並べる。抜き取られた穴があるが、据え付けるための掘形はない。石材の表面は赤黒く変色したり、剥離したりしている。東辺の雨落溝は2箇所屈曲しており、屈曲が建物の柱筋と対応しているとする南北の柱間は3間に復元できる。

整地層からは 期、雨落溝からは 期~ 期の遺物が出土した。また、周辺か

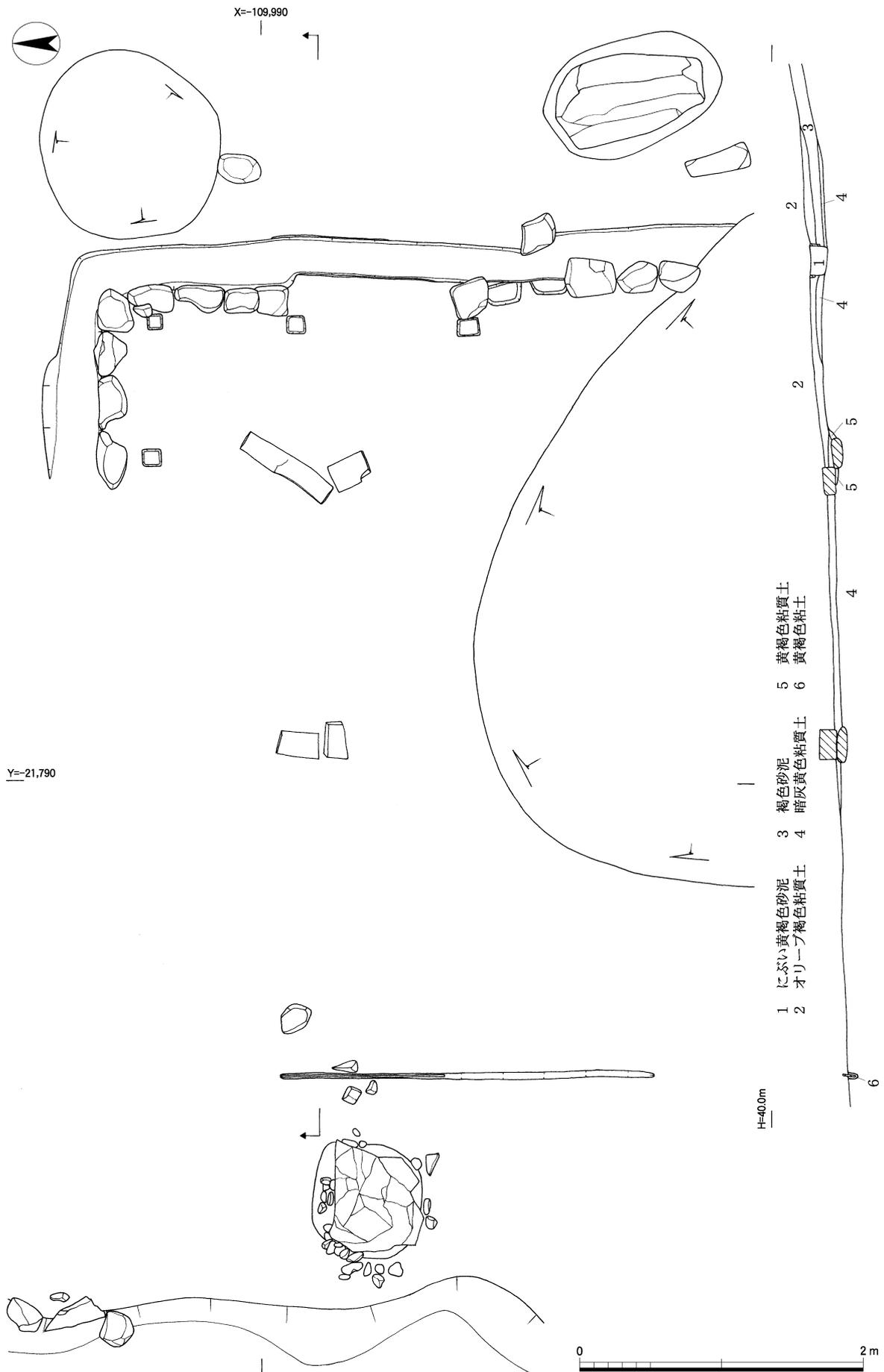


図12 建物215実測図(1:40)

ら焼土や焼けた瓦がまとまって出土しており、雨落溝の石材が熱を受けた痕跡と合わせて、この建物が焼失したことが分かる。

庭石212 中央部の建物215東側に接する位置で検出した。長径約110cm、短径約60cm、高さ約60cmで、重さは計量できていない。材質はチャートで、色調は青黒色を呈する。約4分の1が地中に埋められており、掘形は長径約1.2m、短径約0.8mの楕円形で、深さは約0.2mである。掘形内東側に大きさ約20cmの根石を据える。少量であるが 期～ 期の遺物が出土した。

庭石219(図17) 中央部の建物215西側に接する位置で検出した。割り取られた部分があるが、長径約70cm、短径約60cm、高さ約40cmで、重さは計量できていない。材質は砂岩で、色調は黒色を呈する。約3分の1が地中に埋められており、掘形は直径約0.8mの円形で、深さは約0.3mである。掘形内には大きさ約10～30cmの根石を詰める。少量であるが 期～ 期の遺物が出土した。

溝213 中央部で検出した南北方向の溝である。北側・南側とも調査区外へ延びる。断面形は浅いU字形で、検出した長さは約10.8m、幅は北側で約2.5～2.7m、南側で約1.2m、深さは約0.2～0.3mである。内部には底部に黄褐色粘土・暗灰黄色粘土が堆積し、内部には石組220が構築される。 期～ 期の遺物が出土した。

石組220 中央部の溝213内部で検出した。南北約1.7m、東西約1.7m、残存高約0.4mで、大きさ約30～60cmの河原石を南に開くU字形に2段以上積み上げていたと推定できる。石組の下部から少量であるが、 期の遺物が出土した。

溝216・溝217 調査区西部で検出した。幅約0.3m、深さ約0.1mの断面方形で、両側に板を立てる。板は大部分が腐って損傷しており、厚さおよび樹種は不明である。溝216・溝217とも作り替えた痕跡があり、交錯する部分から溝216が新しいことが分かる。埋土は溝216が暗灰黄色泥砂、溝217がオリーブ褐色泥砂である。池200との関連が推定できるが、機能は不明である。少量であるが、溝216から 期～ 期の遺物が出土した。

池200 第6面は中央部から西部への傾斜が緩やかで汀も作られていないため、池200の輪郭は不明瞭であるが、第3面から第5面と同様、南西側へ向かって調査区外に広がっていたと推定できる。池の底部は地山の砂礫層で、標高は37.5mである。井戸218・井戸210の底部の標高と比較しても湧水が期待できる深さである。東部の平坦面と池底の高低差は、約1.7mである。遺物はほとんど出土しなかった。

## 4 . 遺 物

### ( 1 ) 遺物の概要

出土遺物は土器・瓦類が大部分を占め、他の遺物は少ない。調査では第1面から第6面のそれぞれの段階で遺物を採集したが、新しい時代の遺構埋土に、より古い時代の遺物が混入することがしばしばであった。全体では江戸時代前期から後期の遺物が約1割、桃山時代から江戸時代初頭の遺物が約7割、室町時代の遺物が約2割を占め、平安時代中期から鎌倉時代、弥生時代から古墳時代の遺物は少ない。

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器・黒色土器・白色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・磁器	5箱	土師器4点、白色土器3点、灰釉陶器1点、緑釉陶器1点、白磁1点	4箱	0箱
	軒丸瓦・軒平瓦・緑釉瓦	1箱		1箱	0箱
	曲物・漆器椀・ヒョウタン製品・つけ木・井戸部材	9箱	曲物2点、ヒョウタン製品1点、つけ木4点、井戸部材11点	2箱	0箱
鎌倉時代 ～室町時代	土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・施釉陶器・磁器	44箱	土師器53点、瓦器2点、施釉陶器2点、青磁1点、青花1点	43箱	0箱
	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦	13箱	軒丸瓦6点、軒平瓦5点	12箱	0箱
	漆器椀・礎板	4箱	漆器椀1点	4箱	0箱
	庭石				
桃山時代～ 江戸時代初頭	土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器	101箱	土師器9点、施釉陶器17点、磁器5点	99箱	0箱
	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦	78箱	軒丸瓦2点、軒平瓦7点	77箱	0箱
	漆器椀・板材	3箱	箸6点	3箱	0箱
	石仏・五輪塔・石白	9箱		9箱	0箱
江戸時代前期 ～後期	土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器	10箱		0箱	10箱
	棧瓦・丸瓦・平瓦	7箱		0箱	7箱
計		284箱	145点 (13箱)	254箱	17箱

## (2) 土器類

概要 土器には弥生土器・土師器・白色土器・黒色土器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉陶器・灰釉系陶器・緑釉陶器・施釉陶器・磁器・中国製陶磁器などがある。

烏丸御池遺跡に関連する土器には弥生土器・土師器・須恵器がある。すべて後世の遺構や包含層からの出土で量は少ない。平安時代中期の土器は井戸218、鎌倉時代の土器は庭石212掘形や建物215、室町時代の土器は土壙139・土壙127・土壙126などから出土した。また、鎌倉時代から室町時代の土器は庭園を整備した整地層（第3層・第4層・第5層）からも多く出土している。桃山時代から江戸時代初頭の土器は石垣143埋土・石垣148埋土・土壙158・土壙159などからまとまって出土した。江戸時代前期から後期の土器はほとんどが施釉陶器と磁器である。

整地層（図版13・図13 1～27） 土師器皿（1～12・14～27） 白色土器椀（13） 瓦器鍋釜類・火鉢・須恵器鉢・甕、焼締陶器鉢・壺・甕、灰釉系陶器椀、施釉陶器鉢・壺、中国製白磁椀・青磁椀・青花椀・緑釉陶器盤・褐釉陶器壺などがある。大部分を土師器皿が占めるが、包含層出土のため小破片が多い。第5層出土土師器には赤色系土師器小型皿（1～3）・大型皿（9・10）、白色系土師器小型皿（4～8）・大型皿（11・12）がある。1～3は器壁が厚く、深い形態で、平安京・京都からの出土例は少ない。第4層出土土師器には赤色系土師器小型皿（14～16）・大型皿（21）、白色系土師器小型皿（17～20）・大型皿（22）がある。14・15は1～3と同様の特徴をもつ。第3層出土土師器には赤色系土師器小型皿・大型皿、白色系土師器小型皿（23～26）・大型皿（27）がある。赤色系土師器は個体数が徐々に減少する。白色系土師器は小型皿・大型皿ともに器壁が薄くなる傾向を看取できる。白色土器椀（13）は口ク口成形で底部外面には糸切り痕が残る。また、褐釉陶器壺は白色粘土と黒色粘土を練り込んだ絞胎の壺である。

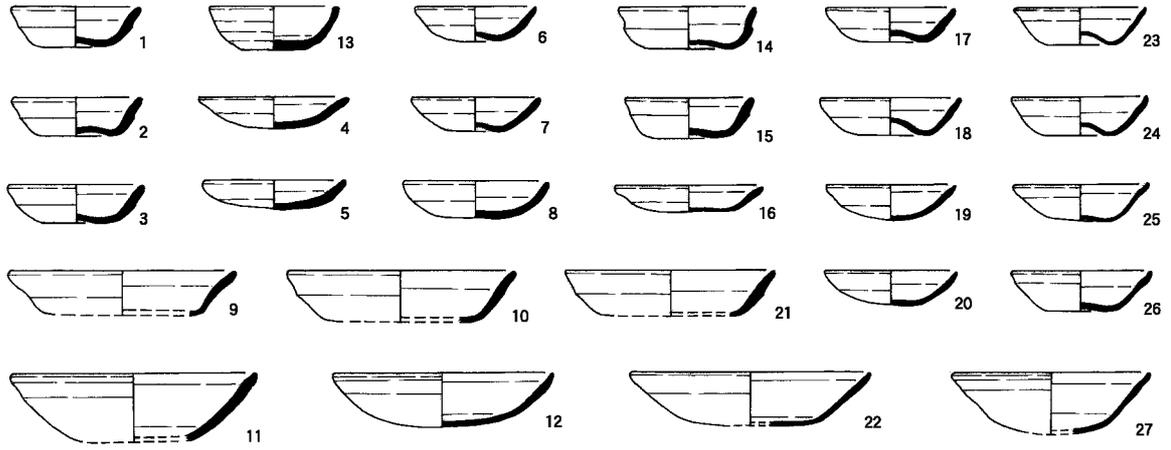
井戸218（図13 28～37） 土師器皿（28～31）・甕、黒色土器椀、白色土器盤（32・33）・椀・高杯（34） 須恵器鉢・壺・甕、灰釉陶器皿（35）・椀、緑釉陶器椀（36） 中国製青磁椀・白磁椀・白磁合子（37）などが出土した。土師器皿には口縁部が強く屈曲する小型皿（28・29）と口縁端部がわずかに外反する大型皿（30）がある。いずれも器壁は薄い。小型の皿（31）は底部外面にヘラ切りが残る。白色土器の割合は大きく、図示したほかにも三足盤・高杯が1個体ずつある。灰釉陶器皿（35）は猿投産、緑釉陶器椀（36）は美濃産と推定できる。中国製青磁椀は越州窯系の蛇の目高台である。白磁合子は蓋と推定できる破片で、外面には花卉状の陰刻を施し、つまみを付ける。内面は施釉しない。 期古段階～中段階に属する。

庭石212（図13 38・39） 少量の土師器皿、瓦器椀・鍋釜類が出土した。土師器には赤色系土師器と白色系土師器<sup>19)</sup>がある。図示した白色系土師器大型皿（38・39）は 期に属する。

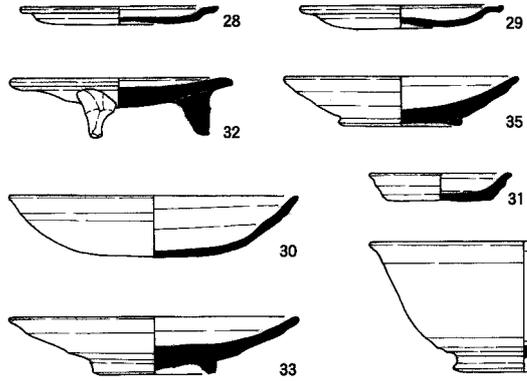
建物215（図13 40・41） 土師器皿、白色土器盤、灰釉系陶器椀、中国製青白磁合子などが出土した。図示した白色系土師器大型皿（40・41）は雨落溝からの出土で 期に属する。

土壙139（図13 42～55） 土師器皿（42～54） 瓦器鍋釜類（55）・火鉢、須恵器甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器椀、施釉陶器盤、中国製白磁椀・青磁椀が出土した。土師器皿が大部分を占め

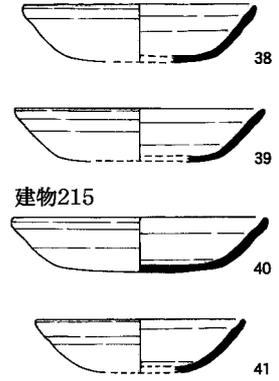
整地層



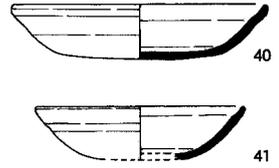
井戸218



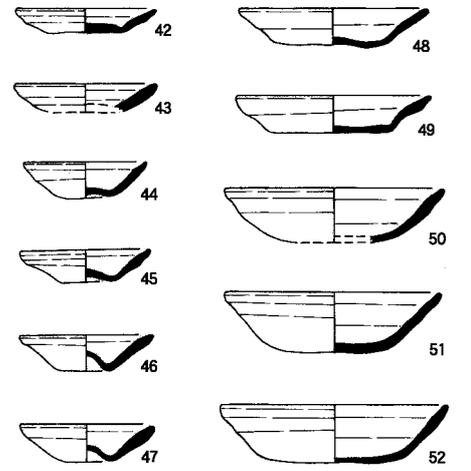
庭石212



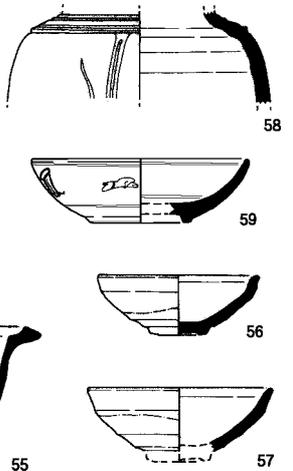
建物215



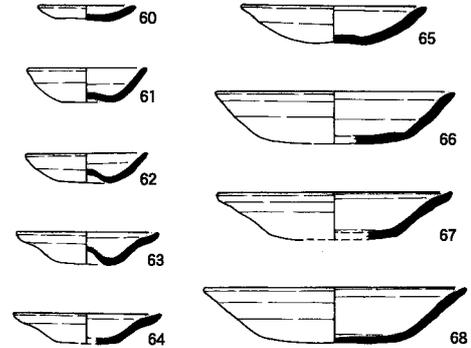
土壙139



土壙127



土壙126



土壙205

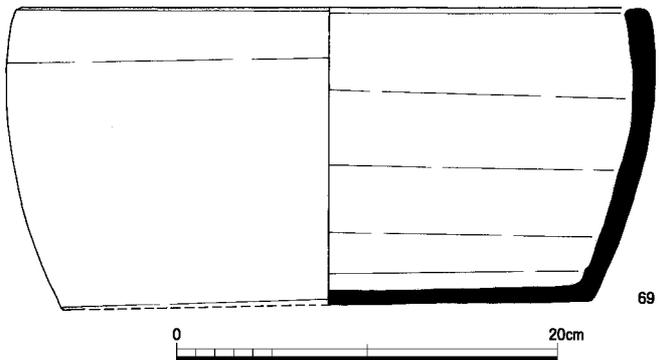


图13 出土土器实测图1 (1:4)

る。赤色系土師器には受皿形皿・小型皿（42・43）・大型皿（48・49）がある。小型皿・大型皿とも口縁部が底部から屈曲して外反気味に開く。白色系土師器には小型皿（44～47）・大型皿（50～52）・特大型皿（53・54）がある。小型皿の多くは底部中央がオサエにより突出する「ヘソ皿」で、オサエの弱いもの（44・45）と強いもの（46・47）がある。大型皿・特大型皿は口縁部が内湾気味に開き、深い形態をとる。瓦器鍋（55）は体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して受け口となる。外面には煤が付着する。施釉陶器盤は瀬戸産で淡黄色の灰釉を施す。期中段階～新段階に属する。

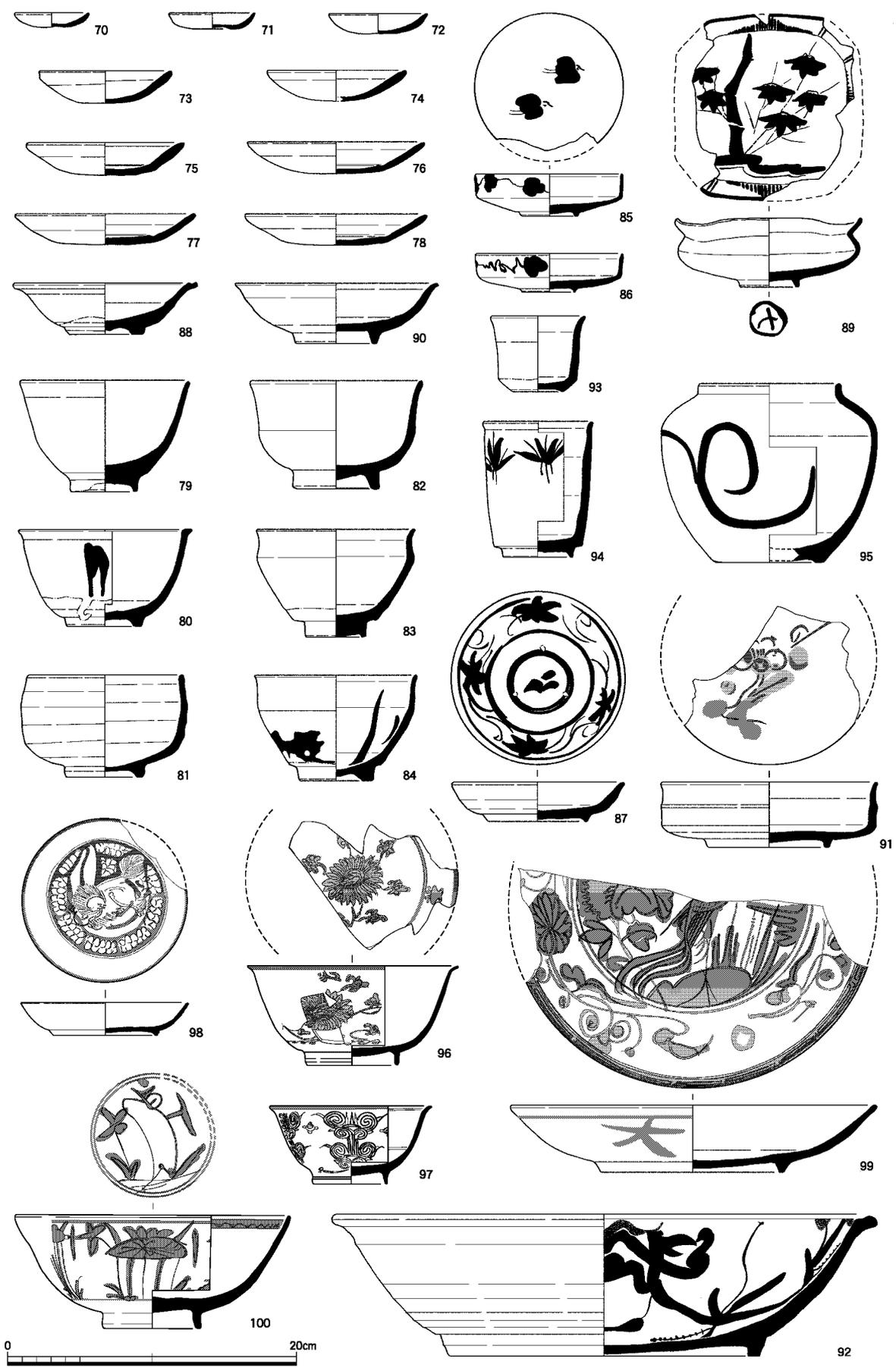
土壙127（図13 56～59） 土師器皿、瓦器鍋釜類・火鉢、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器鉢、施釉陶器椀（56・57）・鉢、中国製白磁椀・青磁壺（58）・青花皿（59）などがある。土師器皿が大部分を占める。特徴は土壙139出土のものと同様であるが、白色系土師器特大型皿は含まれていない。施釉陶器椀は灰緑色の灰釉（56）や褐色の鉄釉（57）を内外面に施す。瀬戸産である。施釉陶器鉢も瀬戸産で淡黄色の灰釉を施す。青磁壺は外面に沈線で文様を描いた後、灰オリーブ色の釉薬を厚く施す。内面は施釉しない。青花皿は底部外面中央をケズリで成形して高台を作る。文様は内外面の圏線のほか口縁部外面や底部内面中央に記号状の文様を飾るが、青色の発色は鈍い。期新段階に属する。

土壙126（図13 60～68） 土師器皿（60～68）、瓦器鍋釜類・火鉢、須恵器鉢・甕、焼締陶器壺、灰釉系陶器椀・壺、施釉陶器椀・皿、中国製白磁椀・青磁椀・緑釉陶器盤などがある。土師器皿が大部分を占める。赤色系土師器には小型皿（60）・大型皿がある。白色系土師器には小型皿（61～64）・大型皿（65～68）がある。小型皿はヘソ皿が多いが、口縁部が内湾気味のもの（61・62）と外反して開くもの（63・64）がある。大型皿は口縁部が外反して開くものが多く、器高が浅くなる。また、胎土は白色から淡橙色に変化する。期に属する。

土壙205（図版13・図13 69） 土師器皿、瓦器椀・鍋釜類・火鉢、中国製磁器椀が出土した。土壙中央に据え付けられた瓦器火鉢（69）以外は小破片である。大和産で、底部の2分の1が欠損しており、据え付けの植木鉢として使用されたと推定できる。期に属する。

石垣143・石垣148・土壙158・土壙159（図版14・図14） 桃山時代から江戸時代初頭の土器は石垣埋土や地下収蔵施設から出土した。遺構ごとに顕著な時期差を認めないので、まとめて述べることにする。また、石垣の裏込め出土遺物と埋土出土遺物の間にも顕著な時期差を認めることはできなかった。

この時期の土器には土師器皿（70～78）・鍋、瓦器火鉢・灯火具・壺、焼締陶器鉢・盤・壺・甕、施釉陶器椀（79～84）・皿（85～87）・鉢（88～94）・壺（95）、磁器の椀（96・97）・皿（98）・盤（99）・鉢（100）などがある。土師器皿は小型皿（70～72）・中型皿（73・74）・大型皿（75～78）に分けることができる。焼締陶器は信楽・丹波産が多く、備前・常滑産は少ない。施釉陶器は多様な形態を示すが、基本的にはロクロで成形の後、底部・体部外面をヘラケズリで調整する。釉薬には灰釉（79・81・88・93・95）・白色釉（82・90）・黒色釉（83）・褐色釉（84）があり、さらに灰釉をたらし掛けしたり（84）、鉄釉（80・85～87・89・91・92・94・95）



や緑釉（91・92）で様々な文様を描くものも多い。87には小さな目痕、88には砂目痕がのこる。唐津産（79～81・88・95）、瀬戸・美濃産（82～84・87・90・92・94）が大部分を占め、それ以外に北部九州産と推定できるものもある（85・86・89・93）。特に85・86・89は唐津産の特徴を備える一方で、器壁が薄く、千鳥や竹の繊細な文様が描かれている。京都での類例の出土はない。磁器はすべて中国製で、景德鎮窯系青花（96）よりも漳州窯系青花（97～100）が多い。特に漳州窯系青花の大型盤・鉢が数多く出土した。 期中段階～新段階に属する。

### （3）瓦 類

概要 瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦のほか少量の棟瓦などがある。平安時代の瓦は少量で、すべて石垣の裏込めなどの後世の遺構や包含層から出土した。緑釉瓦の破片が2点ある。平安時代後期から鎌倉時代の瓦は、建物215の周辺からまとまって出土した。桃山時代から江戸時代初頭の瓦は石垣埋土や地下収蔵施設から出土した。江戸時代中期から後期の瓦はほとんどが棧瓦で、火災の後片付けの土壌などから出土した。

平安時代後期から鎌倉時代（図版15・図15 101～111） 軒丸瓦（101～105）・軒平瓦（107～111）・丸瓦・平瓦・棟瓦（106）などがある。焼けて淡橙色から赤橙色に変色しているものも多い。すべて京都産である。軒丸瓦には蓮華文（101～103）と巴文（104・105）がある。106は瓦当裏面全体に粗いカキメがあることから、棟の飾瓦の一部と考えられる。軒平瓦はすべて剣頭文で、中央に巴文（107）や幾何学文（110）を飾るものもある。瓦当部分はいずれも折り曲げ技法で成形する。

桃山時代から江戸時代初頭（図15 112～120） 丸瓦・平瓦が多く、軒丸瓦（112・113）・軒平瓦（114～120）・棟瓦は少ない。1点のみ瓦当面に金箔を押した金箔瓦（120）がある。軒丸瓦は巴文、軒平瓦は唐草文である。いずれも調整は丁寧で、燻して黒色化する。これらの中には転用された室町時代の瓦が含まれていると考えられる。

### （4）木製品

概要 木製品には井戸部材・曲物・柄杓・つけ木・礎板・漆器椀・地下収蔵施設部材・箸などがある。平安時代中期の井戸から出土したものが多くを占め、鎌倉時代以降の遺構から出土したものは少量で、遺存状況も悪い。

箸（図版16・図16 121～126） 完形品はないが、端部を削って尖らせる。樹種はネズコ（121・124～125）・スギ（122）・ヒノキ（123）がある。 期中段階～新段階に属する。

つけ木（図版16・図16 127～130） 木片を棒状に粗く削る。いずれも先端が焦げる。樹種はスギ（127・129・130）・マツ科（128）がある。 期古段階～中段階に属する。

ヒョウタン製品（図版16・図16 131） 小破片であるが、直径約5cmの穿孔がある。容器などに使用された可能性がある。 期古段階～中段階に属する。

漆器椀（図版16・図16 132） 内外面ともサビ下地2層の黒漆椀である。樹種はケヤキである。

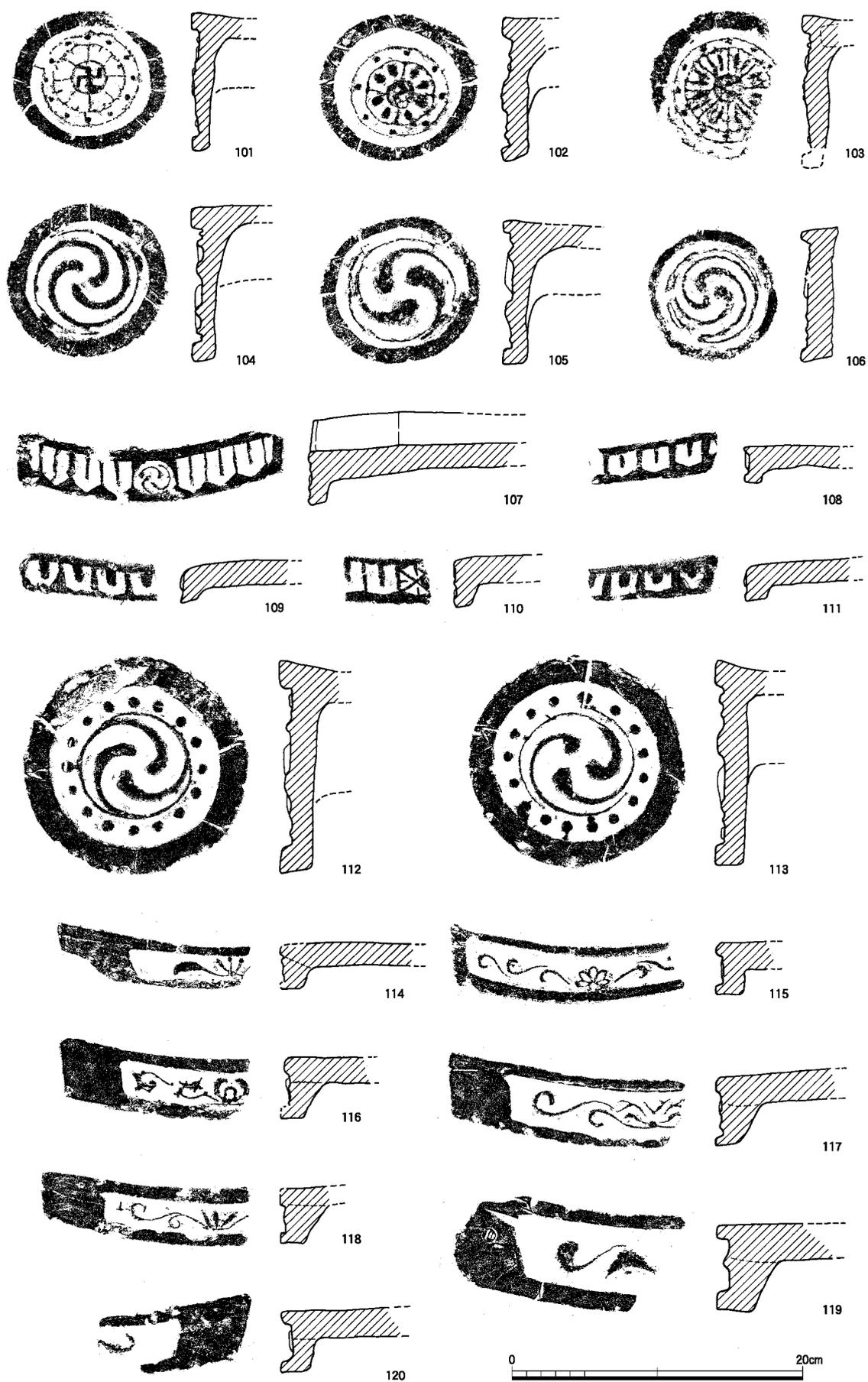


图15 出土軒瓦拓影·实测图(1:4)

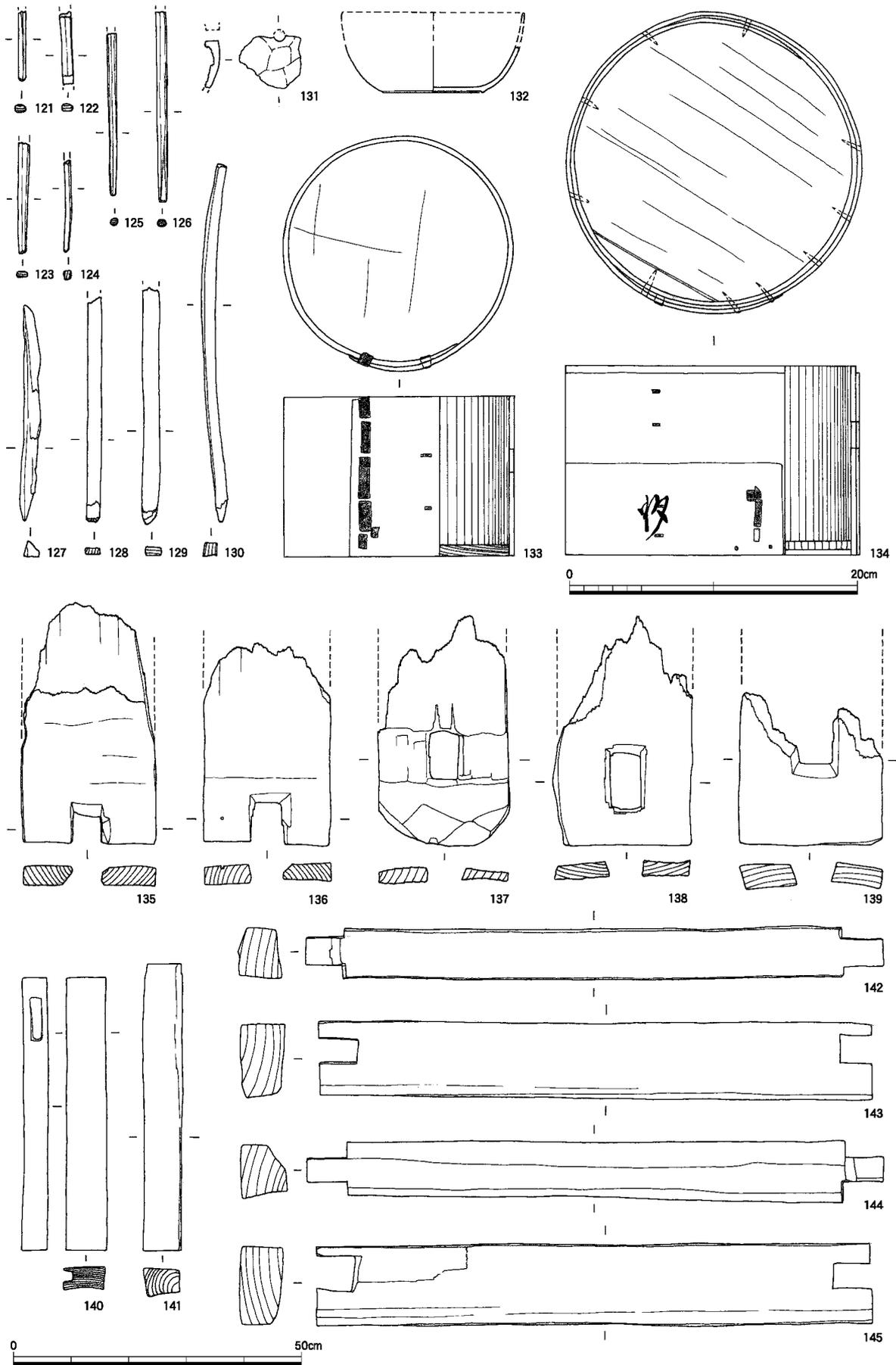


图16 出土木製品実測図 (121~134 1:4、135~145 1:10)

期に属する。

曲物（図版16・図16 133・134） 曲物には井戸210の水溜に使用された大型のものと井戸210・井戸218から出土した中型（134）・小型（133）のものがある。133は切目は縦線のみで、サクラの樹皮で綴じ合わせる。底板の目釘穴はない。樹種はヒノキである。134は切目は縦線のみで、2段の箍で締める。底板は10箇所の目釘で固定する。樹種はイヌマキである。また、外面に「杓」と判読できる墨書がある。なお、2点とも側面に方形の穿孔があることから、柄杓であった可能性がある。 期古段階～中段階に属する。

井戸部材（図版16・図16 135～145） 井戸218の部材である。縦板（135～139）は最下部しか残存していなかった。下端に方形の穿孔があるものもないものがある。また、横棧の痕跡が残るものがある。樹種はすべてスギである。隅木（140・141）は粗く割り削った角材である。樹種はスギである。横棧（142～145）はやや扁平な角材で、両端に柄を作るもの（142・144）と両端がくぼむもの（143・145）がある。142～145がそれぞれ東辺・南辺・西辺・北辺になる。樹種はすべてスギである。 期古段階～中段階に属する。

## （5）その他の出土遺物

概要 その他の出土遺物には土製品・石製品・金属製品・骨角製品・動植物遺体などがある。

土製品 室町時代では内面に銅滓が付着した埴塼がある。桃山時代から江戸時代初頭では焼塩壺・つぼつぼ・おはじき・土人形・鏡鑄型・埴塼・取瓶・フイゴの羽口・炉壁がある。おはじきには土師器皿を丸く再加工したものと瓦質のものがある。埴塼には内面に銅滓が付着したものがあり、銅製品の鑄造が行われたと推定できる。

石製品 室町時代では硯・石鍋・砥石がある。硯は小破片であるが、唐草文を浮き彫りにする。桃山時代から江戸時代初頭では硯・小判形に加工した凝灰岩・砥石・石仏・五輪塔・石臼がある。石仏・五輪塔・石臼は石垣に転用されていたもので、石仏は半分に割られていた。

金属製品 室町時代では用途不明銅製品・銅滓・鉄釘がある。桃山時代から江戸時代初頭では銅銭・キセル・銅火箸・刀金具・銅金具・鋳・銅板・用途不明銅製品・銅滓・鉄釘・鉄鍋・鉄小刀・鉄滓がある。用途不明銅製品は棒状・釘状・L字状・針金状・板状・筒状など様々な形態をとる。用途不明鉄製品は棒状・板状・L字状などの形態をとるが、錆びて遺存状態が非常に悪い。

骨角製品 桃山時代から江戸時代初頭の碁石・おはじき・用途不明板状骨製品がある。碁石は肉厚の貝殻を加工してる。土壌148から30点以上がまとまって出土した。黒石はともなわない。

その他 動植物遺体では平安時代中期では井戸から出土したモモの種子、室町時代・桃山時代から江戸時代初頭では骨や貝殻がある。骨は魚骨・鳥が多く、馬の歯もある。貝殻はアワビ・サザエ・ハマグリがある。これらの多くは食物残滓と推定できる。また、各時代の遺構・包含層から焼土と炭が出土した。調査地で火災がしばしばあったことを示している。

## 5.まとめ

### (1)庭園の構成

調査で検出した庭園は、鎌倉時代前期に造営され、室町時代後期まで維持・整備され続けた。ここでは、その構成をまとめておく。

建物 第6面建物237は新たに造り出された平坦面に建てられた。池に突き出す立地や東西に細長い形状から、庭園の鑑賞を主な目的としていたと推定できる。

第6面建物215は建物237が建てられた平坦面の東側を整地により嵩上げて建てられた。建物237の礎石の直上に礎板を据えていることから、建物237と建物215は連続性をもっていたことが分かる。周囲には庭石212・庭石219、溝213・石組220が配置・整備された。また、周辺からは瓦がまとまって出土しており、屋根の一部に瓦が葺かれていたと推定できる。なお、瓦や雨落溝の石の一部に焼けた痕跡があるので、建物215は火災により焼失したことが分かる。

第4面建物240は東から庭園を見下ろす位置に立地することから、庭園の鑑賞を主な目的としていたと推定できる。また、主屋から独立した建物であったとすると、建物240自体が主屋から見た庭園の中の景色の一つとして鑑賞されていた可能性がある。

第3面建物239は2基の柱穴が建物240と重複していることから、建物240と建物239は連続性をもっていたことが分かる。建物240と同様の機能を担っていたのであろう。

斜面 少なくとも3回にわたり段差から西側へ向けて整地が行われ、傾斜は徐々に緩やかとなったが、東側が高く、西側の低い部分に池が広がる構成は同じである。また、東側の高まりと池底では2m近くの高低差があり、立体的な造形がこの庭園の最大の特徴であったと指摘できる。

庭石(図17) 庭石には掘形が明瞭ではないもの(庭石211・庭石154・庭石153)と明瞭な掘形があるもの(庭石212・庭石219・庭石136)がある。第5面庭石211は洲浜の直上に置かれた状態で、根石で支えた痕跡もなかった。庭石211の底部が平坦な形をしているためと考えられる。また、第3面庭石154・庭石153は底部が平坦ではないことから第3層の整地と同時に据え付けられたと推定できる。一方、掘形がある庭石は、庭石よりもやや大きい掘形の中に根石を入れて庭石を据える。特に第3面庭石136は掘形が大きく、根石も密である。

これらのほか第1面土壌11・土壌27から出土した庭石も庭園を構成していたと考えられる。土壌27出土の庭石は、出土位置からみて庭石154・庭石153と組み合わせられていた可能性が高い。また、庭園の整備の過程で、より古い段階の庭園を構成していた庭石が、より新しい段階の庭園に再利用されたことも十分に考えられる。

植栽 池200は第2面の石垣や地下収蔵施設により攪乱を受けたこともあって、泥土の堆積がなかった。そのため植栽を復元するための種子・花粉の分析は行っていない。植栽に関する手掛かりは、植木鉢と推定した第4面土壌205のみであるが、おそらくは多数の樹木や草花が植えられていたことであろう。

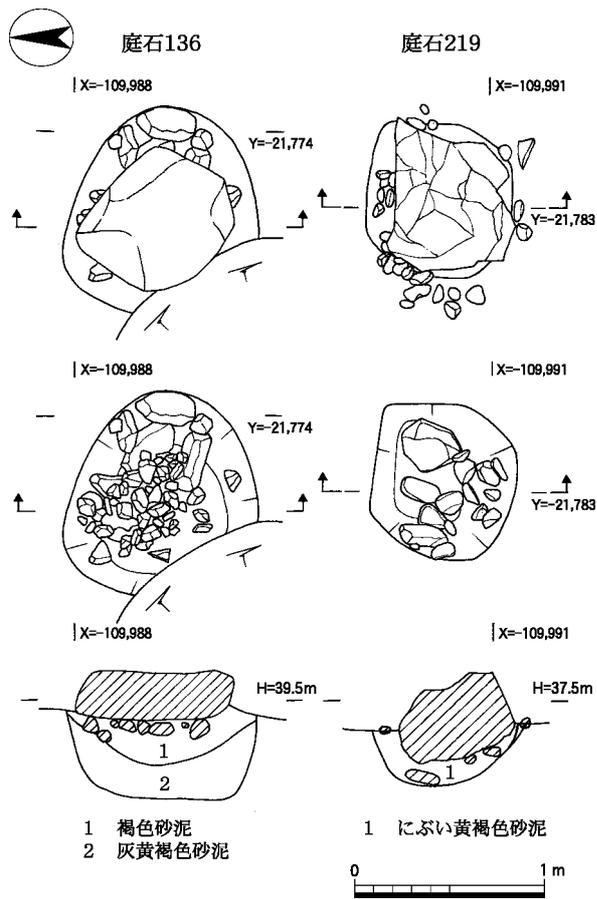


図17 庭石136・庭石219実測図(1:40)



図18 池200洲浜第5面(北西から)

洲浜(図18) 洲浜は第5面・第4面・第3面の池200の汀に作られていた。新しい段階ほど整地による嵩上げのために傾斜が強くなるが、調査区内では北西から南東に向かって緩やかに湾曲する平面形態は同じである。洲浜には小石や白砂が敷かれ、表面はやや堅く締まる。一方、下部には整地層が連続し、粘土などを貼ったりする特別な施工はない。

池 池は南西方向に向かって広がっており、調査で検出することができたのは全体の一部分である。池底は砂礫層が露出しており、泥土の堆積がないことから、豊富な湧水があったと推定できる。また、池からの出土遺物がほとんどないことから、ゴミなどが捨てられることは少なく、しばしば池浚えが行われて整備が行き届いていたと推定できる。

## (2) 遺構の変遷

今回の調査では、時代ごとに異なった様相を見せる、調査地の歴史の変遷を明らかにすることができた。最後にその概要をまとめておく(図19)。

調査で検出した最も古い遺構は平安時代中期の井戸218・井戸210であり、遅くともこの時期には十町に邸宅が営まれていたと推定できる。庭園の存在を含め邸宅の詳細は明らかではないが、鎌倉時代に行われた土地の改変からみて、西側が低くなる地形がすでに存在していたと考えたい(図19-1)。

井戸218・井戸210は上部が壊されていることから、鎌倉時代にこの部分の地山を削って段差が

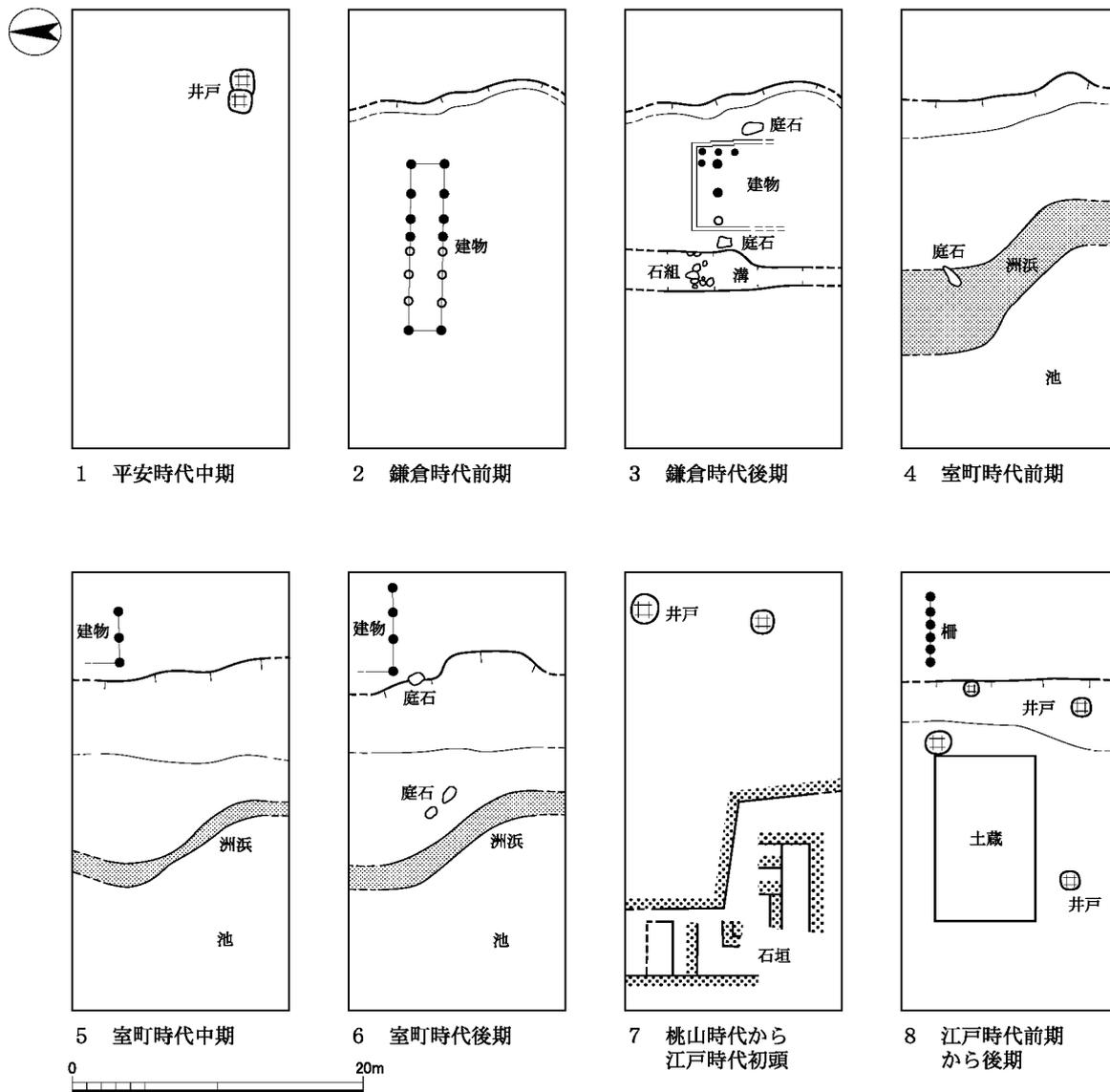


図19 遺構変遷概要図 ( 1 : 500 )

形成され、西側に平坦面が作り出されたことが分かる。平坦面には建物237が建てられる。池は輪郭が不明瞭であるが、池の底部は平安時代の井戸底部の標高からみて湧水が期待できる深さである。建物237の間近まで汀が寄せていた情景を想像することも可能である ( 図19- 2 )。

建物237が廃絶した後、段差の西側には整地により嵩上げが行われ、建物215が建てられる。東側には庭石212、西側には庭石219を据える。嵩上げにより池の汀は西へ移動したと考えられ、中央部の溝213や石組220はこれにともない構築された。建物215は火災により廃絶する ( 図19- 3 )。

室町時代になると、段差から西側に向けてたびたび整地が行われ庭園が整備された。室町時代前期の庭園は小石を敷き詰めた緩やか湾曲する洲浜が作られ、庭石211が配置された ( 図19- 4 )。

室町時代中期の庭園は基本的な構成は同じだが、白砂のみで洲浜を作る。平坦部には植木鉢と推定できる土蔵205がある。また、東部の平坦面には建物240が建てられる。建物240は庭園に付属する施設であったと推定できる ( 図19- 5 )。

室町時代後期の庭園も基本的な構成は同じだが、小石と白砂で洲浜を作り、庭園の傾斜が変わ



図20 『洛中洛外図』に描かれた二条殿（『洛中洛外図屏風』米沢市上杉博物館所蔵）

る位置に庭石136・庭石154・庭石153を据える。また、建物240と同じ位置に建物239が建て替えられる（図19-6）。上杉家本『洛中洛外図屏風』に描かれた「二条殿」はこの時期に該当する（図20）。絵画ではかなり簡略化されているが、東側に建物、西側に池がある配置や池・庭石・植栽によって庭園が構成される様子は調査成果と比較しても矛盾しない。二条殿の庭園は名園として知られており、整備の機会ごとに意匠を尽くした作庭が行なわれたことを明らかにすることができた。

桃山時代になると池が埋め立てられ、石垣や地下収蔵施設が構築された。庭園の廃絶は二条屋敷の造営や本能寺の変が原因であろう。ただし、二条屋敷に該当する遺構は検出していない。石垣は組合せの状況から少なくとも2回以上の施工段階があったと考えられ、最初に構築された石垣149・石垣151・石垣150は池200の汀の湾曲にほぼ一致している。地下収蔵施設は石垣と一体に構築されており、ここに大がかりな建物があったことは間違いないが、現段階では建物の構造や性格は不明である（図19-7）。

江戸時代前期では大型の土蔵である建物10を検出したことから、両替町通に出入口を開く商家が建ち並んでいたと推定できる。段差の東側と西側では土地の利用が異なっていた。建物10の基礎の西辺・南辺が嚴重に構築されていたことは下層の池の軟弱な堆積を補強したものと考えられる。（図19-8）調査地で東部と西部の高低差がなくなるのは近代以降のことである。

今回の調査では時代ごとに異なった様相を見せる庭園の歴史的変遷を明らかにすることができた。現在は完全に都市化した調査地で、営々と巧みな造園が行われていたのである。また、龍池

町・御池之町・二条殿町など地元の地名の由来となった遺跡を発掘調査で明らかにすることができたことは大きな成果であった。

#### 註

- 1) 『平安京左京三条三坊 京都労働金庫建設予定地における発掘調査の概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
- 2) 『平安京左京三条三坊七町』『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
- 3) 『左京三条三坊』『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- 4) 『主要な出土遺物』『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 5) 『平安京左京三条三坊』『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 6) 『押小路殿跡 平安京左京三条三坊十一町』(財)古代学協会 1984年
- 7) 『平安京左京三条三坊十一町』(財)古代学協会 1984年
- 8) 『左京三条三坊跡試掘調査』『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和54年度』京都市文化観光局文化財保護課 1980年
- 9) 『左京三条三坊』『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983年
- 10) 『No.62』『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年
- 11) 『左京三条三坊』『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 12) 『平安京左京三条三坊』『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 13) 『No.20』『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年
- 14) 『平安京左京三条三坊』『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 15) 『No.19』『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年
- 16) 『No.4』『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年
- 17) 藤谷寿・中谷雅治「押小路殿の研究」『平安博物館研究紀要』第二輯 1971年、『押小路殿跡 平安京左京三条三坊十一町』(財)古代学協会 1984年
- 18) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 19) 『平安京左京二条四坊十町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第19冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2001年

#### 参考文献

- 川上 貢「撰関家二条家の押小路殿と報恩寺屋敷」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001年
- 川上 貢「将軍義昭の武家御城と織田信長の二条新造御所」『リーフレット京都 121』(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1999年
- 田中幸夫「中世から近世にかけての京都近隣の瓦 - 押小路殿(二条殿)瓦を中心にして - 」『京都考古』1993年

圖 版

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょうさんぼうじゅっちょう (おしこうじどの・にじょうどの) あと							
書名	平安京左京三条三坊十町 (押小路殿・二条殿) 跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2002-7							
編集者名	山本雅和							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2002年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
からすまおいけいせき 烏丸御池遺跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区	26100	463	35度 00分 29秒	135度 45分 40秒	立会調査 2001年9月 17日～2001 年9月21日 発掘調査 2001年10月 15日～2002 年4月12日	460㎡	京都労働 基準局 改築工事
へいあんきょうあと 平安京跡	りょうがえまちどおりおいけ 両替町通御池		470					
にじょうどのおいけじょうあと 二条殿御池城跡	あがるきんぶさちょう 上る金吹町451							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡 平城跡	平安時代	柱穴・井戸	土師器・黒色土器・白色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・磁器・瓦・木製品・植物遺体		井戸を検出した。		
		鎌倉時代・ 室町時代	建物・柱穴・土壇・溝・石組・庭石・池	土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・土製品・石製品・金属製品・木製品		押小路殿・二条殿の庭園の変遷が明らかとなった。		
		桃山時代～ 江戸時代初頭	柱穴・井戸・石垣・地下収蔵施設・土壇	土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・土製品・石製品・金属製品・木製品・骨角製品・動物遺体		石垣・地下収蔵施設を検出した。		
		江戸時代前期～ 後期	柵・建物・柱穴・井戸・石室・土壇	土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦		商家の一部を検出した。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-7

平安京左京三条三坊十町  
(押小路殿・二条殿) 跡

発行日 2002年7月31日

編集  
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961